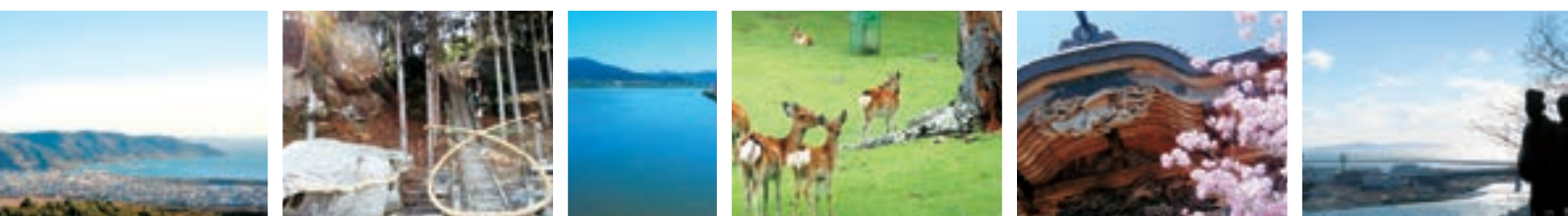




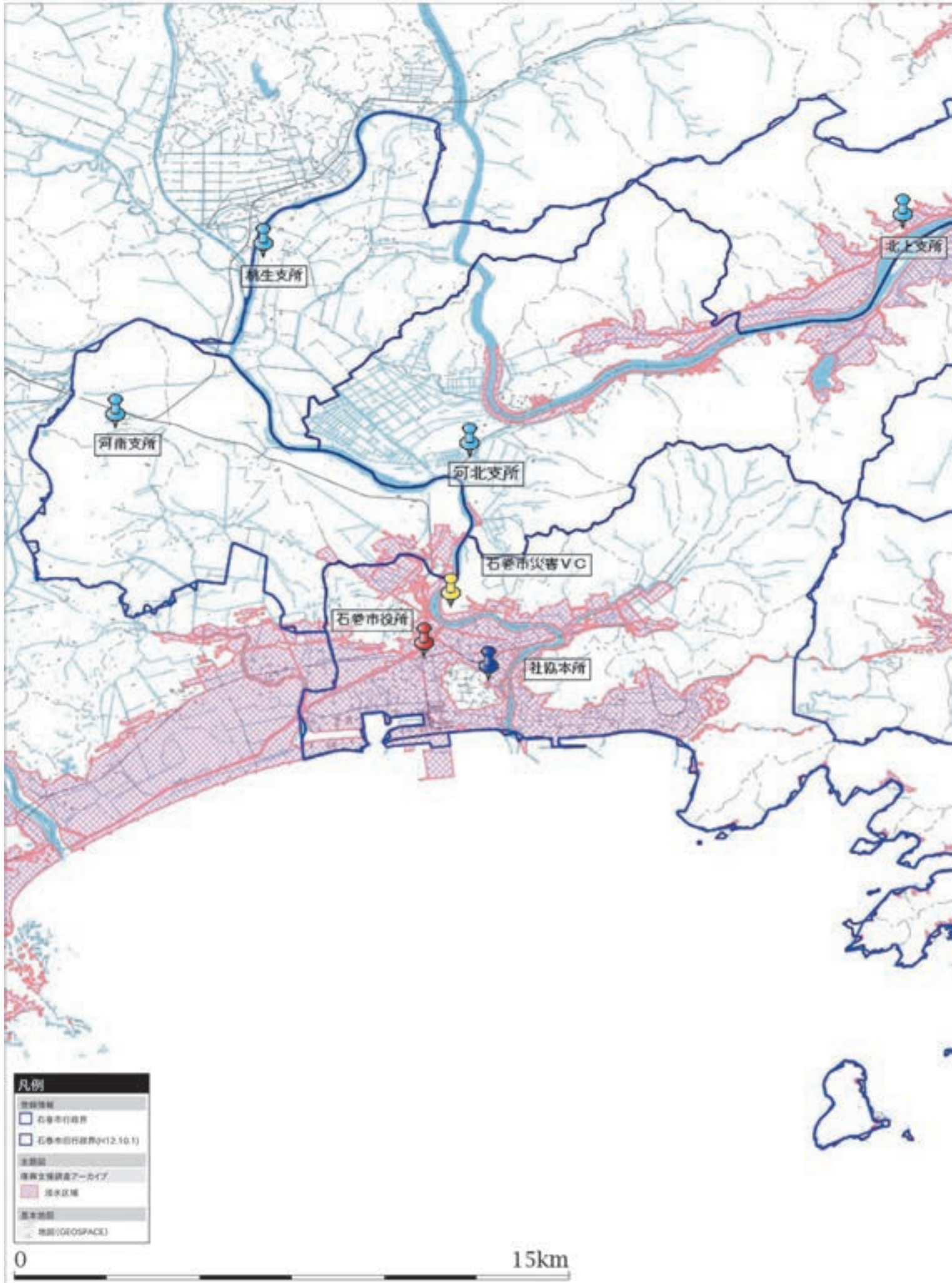
# 石巻市災害ボランティアセンター事業報告書

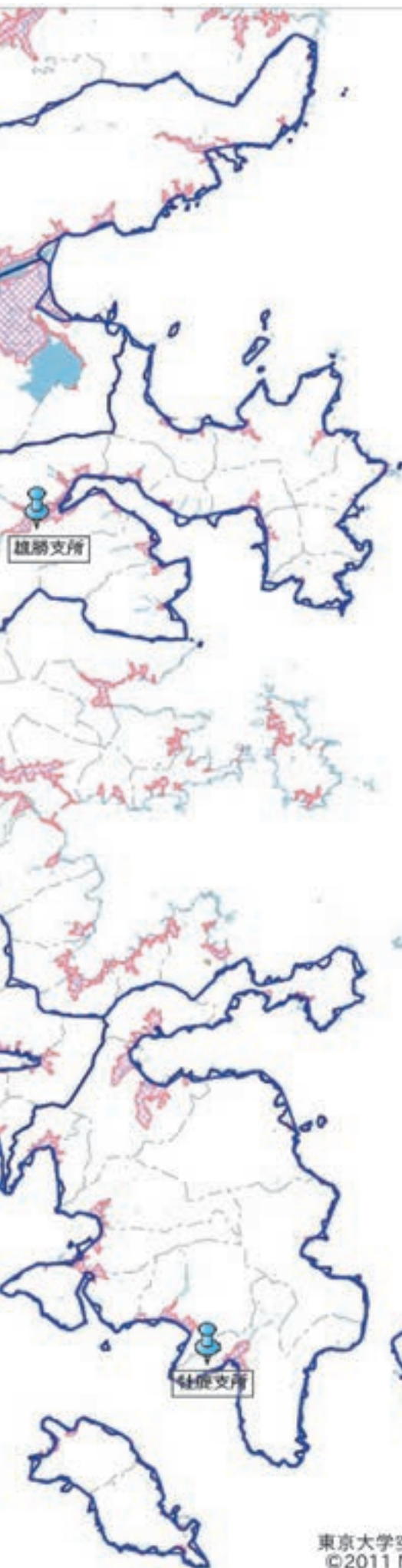


社会福祉法人 石巻市社会福祉協議会









---

もくじ

---

ごあいさつ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2  
石巻市社会福祉協議会 会長 高橋 興治  
石巻市市長 亀山 紘  
石巻専修大学 学長 坂田 隆様  
石巻市の被害概況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5  
石巻市災害ボランティアセンター開設・・・・・・・・ 6  
災害ボランティアセンターのポイント・・・・・・・・ 7  
災害ボランティアセンター各班の役割・・・・・・・・ 9  
甚大な被害を受け注目された中で・・・・・・・・・・ 11  
復興へ向けての支援の力と課題、そして経験を活かすために！ 12  
全国社会福祉協議会ブロック支援一覧・・・・・・・・ 14  
物資・物品・寄付金提供一覧・・・・・・・・・・・・ 16  
災害ボランティアセンター運営実績・・・・・・・・ 18  
季節の移り変わりと支援・・・・・・・・・・・・・・ 20  
NPO・NGO・任意団体との連携・・・・・・・・・・・・ 26  
「復興のために！」～ご支援をいただいた皆さまの声～ 28  
「地域のリーダーとして！」～市民の声～・・・・・・・・ 37  
社会福祉協議会としてのこれから・・・・・・・・・・ 40  
～結びに～・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 41  
石巻市社会福祉協議会 常務理事兼事務局長 大槻英夫



# ごあいさつ

## 発刊にあたって

平成23年3月11日(金)午後2時46分、東北地方太平洋沖地震が発生し、その後の大津波による被害と震源域(岩手県から茨城県までの南北500km、東西200km)により、我が国の観測史上例のない大災害(東日本大震災)となりました。

石巻市における被害は、大津波によって市の面積(555.6km<sup>2</sup>)の13%にあたる73km<sup>2</sup>が浸水し、多数の尊い人命が失われるとともに、建物被害においても家屋の流出をはじめ、沿岸部の産業等に大きな被害をもたらしました。

当会の取組みとしては、震災前から石巻市との協議を重ね、大規模災害時における準備として、市民の皆様を対象にした災害ボランティアフォーラムの開催や、職員の共通理解を構築するための災害ボランティアセンター運営訓練を実施してきたものの、「未曾有の災害」や「想定外の災害」とメディア等で報道されたように、現実的にはライフラインの復旧もさることながら、役職員自体も被災しながらのセンター運営を余儀なくされ、それぞれに苦悩や葛藤もあったことと察します。

しかしながら、全国の皆様から温かい物心両面のご支援をいただき、災害ボランティアセンターとしては、役職員一丸となって取り組むことができ、石巻市においてのボランティア活動登録者は約30万人を数え、中間支援組織としての役割として一定の成果はあったものと思っております。

現在は、震災復興に関する事業として、応急仮設住宅やみなし仮設住宅支援事業を市から受託し、入居者の安全等の支援を行っております。さらに、「地域福祉コーディネーター」を10人配置して、担当エリア毎に様々な関係機関との連携を図りながら、地域の調整役となれるよう努力しております。

今後は復興期における新しいコミュニティ支援や、復興公営住宅入居者も念頭に、各地域における歴史的な背景等の実情を勘案しながら、市民の皆様とともに自助力や共助力を高められるよう支援して参りたいと考えております。

最後になりますが、全国各地からボランティアとして来石された方や、様々な企業の皆様の尊いご尽力によって、私も含め多くの石巻市民を支えてくださったことに、心から厚く御礼申し上げます。お蔭様をもちまして、この3月31日で「災害ボランティアセンター」につきましては閉所の運びとなりました。

まだまだ復興への道半ばでもあり、復興支援事業として社会福祉協議会の役割を果たせるよう、役職員が一丸となって支援事業を推進して参る所存でございますので、今後ともご支援を賜りますようお願い申し上げ、発刊にあたってのご挨拶とさせていただきます。



社会福祉法人  
石巻市社会福祉協議会  
会長 高橋 興治



## 「石巻市災害ボランティアセンター 事業報告書」に寄せて



石巻市  
市長 亀山 紘

平成 23 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災により、本市では多くの尊い命が絶たれました。また、同時に石巻という土地で培ってきた産業や街並み、生活インフラなど壊滅的な被害を受け、被害者の方々が長年親しんできた地を離れざるを得ない状況となり、地域コミュニティをはじめとした「あたりまえにあるもの」の多くを失いました。この甚大な被害をもたらした東日本大震災から 3 年が経過しましたが、この間本市では皆様の心温まる御支援、御協力をいただきながら、各種復興事業に取り組んでおりました。この東日本大震災を教訓に災害に強い街づくりを推進しながら快適で住みやすく、市民の夢や希望が実現する「新しい石巻」を創造することが、皆様への恩返しであると考えております。

さて、本市における災害ボランティアセンターの設置・運営は、地域防災計画において石巻市社会福祉協議会が中心となって行うこととしておりました。当協議会の皆様方には、東日本大震災発災から現在に至るまで多大なる御苦勞をお掛けしましたが、皆様方の発災前からの研修や訓練などの準備により、発災当初から 26 万人を超える市内外、そして世界各国から多くのボランティアの皆様にご支援をいただき、ガレキ撤去や泥出し作業等を行っていただきました。このことにより、阻まれた道路や閉ざされた住宅の復旧を早めることができ、多くの市民に希望の光を与えていただくとともに、人を思いやる気持ちの温かさと絆の大切さを改めて教えていただきました。これを機に多くの市民が福祉に対する理解を深め、地域福祉活動に積極的に参加されますと共に、ボランティア活動の輪がますます広がっていくことを切に願ってやみません。

災害ボランティアセンターにつきましては、本市の復興計画において復旧期から再生期にステージが切り替わる平成 26 年 3 月を以て、閉所することといたしました。これを契機に発刊される事業報告書は、これまでの御支援や御協力をいただいたボランティアの皆様への感謝の気持ちを市民の心に刻みますとともに、災害を風化させることなく防災意識を保持し、ボランティアの育成・啓蒙始め、本市職員の災害対応能力の向上にもつながるものと確信しております。

結びに、本事業報告書を作成いたしました石巻市社会福祉協議会の皆様や各関係団体の皆様、支援を頂きました全国各地のボランティアの皆様方の益々のご発展と、ご多幸をお祈り申しあげましてあいさつとさせていただきます。





## 発刊にあたって

2011年3月11日に発生した東日本大震災で、石巻専修大学が位置する石巻市は甚大な被害を被った。しかし、本学では建物の被害や地盤の液状化がほとんどなく、全く浸水しなかったため、震災当日から避難者を受け入れ、石巻市災害ボランティアセンターをはじめ、日赤の救護所や自衛隊の宿営、宮城県東部地方振興事務所など、様々な機関に施設を提供した。

このなかで、ボランティアセンターだけが「想定内」のことであった。震災の年の3月30日に、学内へのボランティアセンターの設置を中心とした防災協定を石巻市と締結する運びになっており、内容の実質的な合意はできていた。したがって、ボランティアセンターの事務所の場所や、大学のルールを守っていただくこと等の運営方法も決まっていた。

想定外であったのは、規模であった。3月下旬から5月にかけて、学内の芝生はボランティアの方たちのテントが埋め尽くした。野球部の室内練習場は物資倉庫になり、5号館3階の学生ホールはボランティアの方たちの会議場になった。860台収容の駐車場には大型バスやトラック、作業用の自動車がとまり、普段はサッカーの練習をするグラウンドには大型のヘリコプターがひっきりなしに発着した。

震災直後からヘリコプターでずぶ濡れの被災者が学内に運び込まれた。学生や教職員が、理屈抜きで飛び出して行って、教室に運び込み、私物の着替えや白衣を提供し、学生用に備蓄してあった食糧を分かち合った。おそらく、今回の学生ボランティアの第一号であったろう。学内にボランティアセンターが開設された直後に、一番乗りで登録したのも本学の学生教職員であった。

津波で浸水した自宅に戻った被災者は、どこから手を付けたら良いか、呆然とする。そこにボランティアの方たちがまわって来て、濡れた布団や畳、家電製品などを屋外に運び出してくれる。すると、「私も頑張ろう」という気持ちが被災者にわいてくる。ボランティアの方たちの活動の意味合いは、実際の作業だけではない。被災者の勇気を奮い立たせてくれたのだ。

社会福祉協議会がボランティアの人たちと大学の間の窓口になってくださったおかげで、大学とボランティアの関係は円滑であった。禁酒と交通規則は厳しく守っていただいたが、バーベキューには眼をつぶることにした。まだ私たちの食糧事情は厳しかったので、避難所の被災者においしい匂いが届かないことを願いながらのことであった。

これだけの規模のボランティアセンターを日本国内で運営したのは、石巻市災害ボランティアセンターが最初だったのでしょ。私たちは、社会福祉協議会の皆さんが毎日新しいやり方を創造されるところをつぶさに拝見していました。その創造性に敬意を表しますとともに、国内外から参集されたボランティアの皆様へ心からお礼を申し上げます。有り難うございました。



石巻専修大学

学長 坂田 隆



# 石巻市の被害概況

青森県東部から千葉県まで、太平洋沿岸の広範囲にわたり甚大な被害をもたらした東日本大震災は、石巻市の尊い人命を奪い、あらゆる分野に大きな打撃を与えました。

地震名：平成 23 年東北地方太平洋沖地震  
災害名：東日本大震災  
発災日時：平成 23 年 3 月 11 日（金）14 時 46 分頃  
マグニチュード：9.0  
最大震度：震度 7

## \*石巻市\*

最大震度：震度 6 強  
最高津波高：8.6 m 以上（鮎川検潮所）  
津波到達時間：15 時 26 分頃  
死者：3,518 名（平成 26 年 1 月末現在）  
行方不明者：439 名（平成 26 年 1 月末現在）  
負傷者：多数  
人口：162,822 名（震災前）  
男性：78,534 女性：84,288  
150,879 名（平成 26 年 1 月末現在）  
男性：73,221 女性：77,658  
応急仮設住宅：7,297 戸

## \*被害範囲\*

浸水面積：73 km<sup>2</sup>（市域面積：556km<sup>2</sup>）  
全壊家屋：22,357 棟  
半壊家屋：11,021 棟  
一部損壊家屋：20,364 棟

## \*産業被害\*

水産業：44 港・200 社（100%）  
農林業：1,834 ha（20.7%）  
製造業：1,749 社（67.3%）

# 石巻市災害ボランティアセンター開設



## ■石巻市社会福祉協議会としての災害ボランティアセンター

### (1) 取組みの経過

宮城北部連続地震をはじめ、新潟中越地震などの各被災地へ職員派遣をしてきたことから、職員の半数以上が被災地支援等の経験をしていた。

また、高い確率で宮城県沖地震の発生が予想されたため、石巻市から毎年度、災害ボランティアセンター事業に係る補助金を受け、災害に備えたフォーラム・研修を開催するとともに、総合防災訓練等にも積極的に参加してきた。

### (2) 災害ボランティアセンター設置の根拠

#### ①三者協定（平成17年9月13日）

宮城県、石巻市、石巻市社会福祉協議会三者で、大規模災害時における「災害ボランティアセンターの設置・運営に関する覚書」を交わした。

#### ②石巻市地域防災計画に石巻市社会福祉協議会（以下「市社協」という。）が中心となって運営する「石巻市災害ボランティアセンター」（以下「災害VC」という。）を設置する旨を位置付けている。

#### ③石巻市社会福祉協議会災害対策要綱（平成20年10月1日改正）

#### ④石巻市社会福祉協議会災害ボランティアセンター設置要綱（平成18年4月1日制定）

## ■石巻市役所からの委託

災害VCの設置に関する覚書に基づき、東日本大震災直後の3月13日に石巻市から設置要請があり、衛星電話の設置と合わせ3月15日から11月30日まで、石巻専修大学5号館に設置した。



# 災害ボランティアセンターのポイント

- ①宮城県沖地震の発生が想定されていたため、危機感を持ち、社協として災害 VC の設置と必要性について検討してきた。  
また、大規模な災害が発生した場合、仙台までは大勢のボランティアは来ても、石巻まで来るボランティアは少ないとの予測をしていた。
- ②災害発生時には通信網が麻痺することから、本所及び各支所・施設と緊急時の連絡が可能なよう無線機を配備していた。  
このため、職員の安否と被害状況を確認すると共に、報告、連絡、相談を円滑に行うことができた。
- ③勤務中の地震発生であったことから、直ちに日和山にある老人福祉施設（寿楽荘）に本所の全職員が避難し、災害 VC 設置について協議、職員の意思統一を図った。
- ④職員の中に、災害に係る全国組織（全国災害ボランティア活動支援プロジェクト会議）のメンバーがいた。
  - 携帯電話の通じるうちに、全国共同募金会や全国災害ボランティア活動支援プロジェクト会議等に連絡し、NPO等のボランティアの要請と物資の依頼をした。
- ⑤日頃から、業務において石巻市と密接な連携をしていたことで、災害 VC の拠点となる場所（石巻専修大学）を事前に決めていた。
- ⑥災害 VC の運営は、事務局長を総括責任者、2 課長を副総括とし、総務班、受付（登録）班・ニーズ班・マッチング班等、その他各班の役割分担を明確にした。  
※当初の 3 か月間は職員 47 名体制（ヘルパーは福祉避難所支援、施設職員は施設の清掃等、利用者の受入準備）
  - 3 月下旬から、全国社協（近畿、四国、中国エリアの市町村社協）の他、自主的支援の社協や、県内の大崎市社協の職員派遣支援を頂いた。※報道関係についての情報発信の窓口の一本化を図った。（情報の複層防止）  
※市をはじめ、他の機関等の連絡調整の窓口の一本化を図った。（情報の複層防止）
- ⑦平成 23 年度の社会福祉協議会としての全事業を凍結し、災害 VC 運営による災害支援を優先することを理事会にて決定した。  
※介護保険事業及び障害者福祉施設については可能な範囲での事業を再開することとした。  
※老人クラブ等の各福祉団体等は自主運営とした。
  - 災害復旧に伴い、被害の少なかった内陸部の支所より段階的に事業を再開した。

## ■大崎市社会福祉協議会の協力

災害 VC 発足時の混乱期から、長期間に渡る職員派遣及び活動車両の貸与協力いただきました貴会には大変感謝申し上げます。

特に、職員派遣につきましては、変動する市民ニーズに対応する支援の方向性等について、同一意識を持つことができ、職員交代後も即戦力として協働できました。

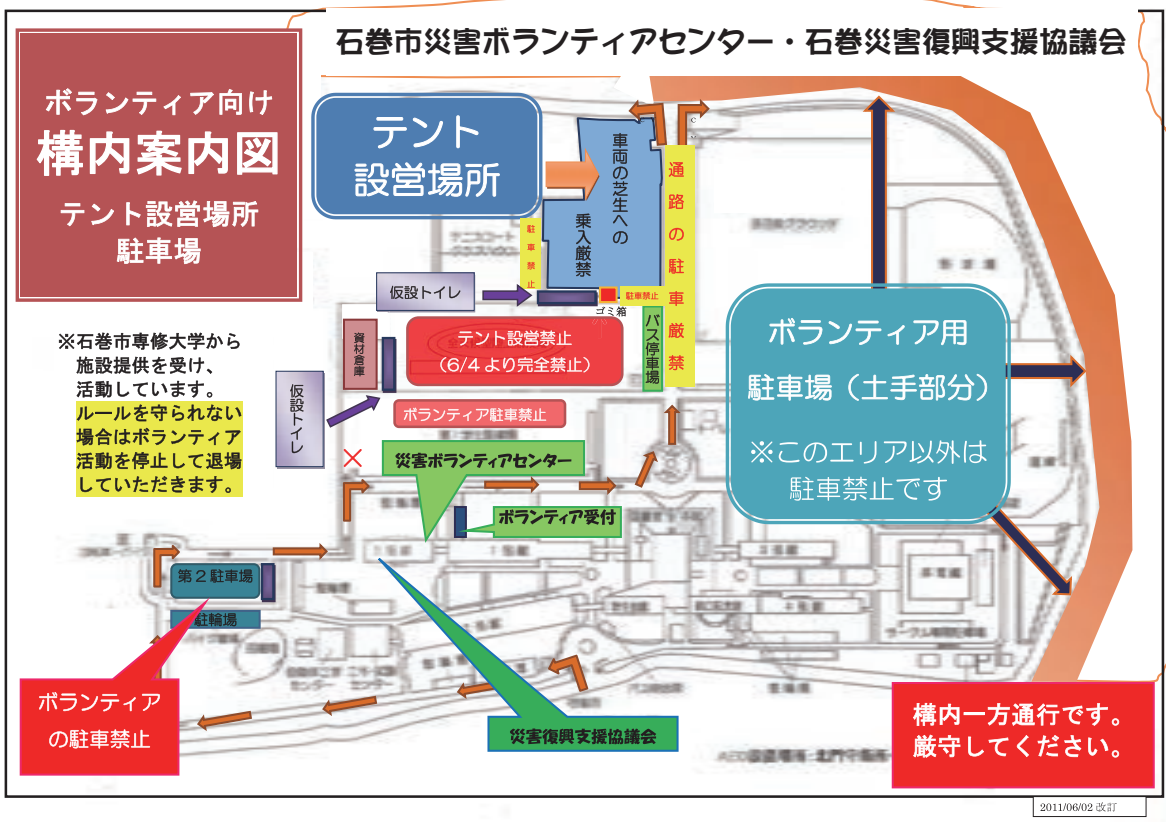
## ■石巻専修大学の協力

有事に備えた災害ボラセンの設置場所について市と検討を重ね、これに基づき、市と石巻専修大学との間で協議を進め、石巻専修大学に協力をいただくことで、平成23年3月31日に市と石巻専修大学との間で調印する運びとなっていた。

東日本大震災の災害ボラセン設置は、この経過を踏まえ以下の施設等を借用した。

- ・「災害ボラセン事務所」－石巻専修大学5号館内（5～6教室）
- ・「ボランティア用駐車場」－学生用2ヶ所の駐車場
- ・「物資保管及びボランティア避難場所」－野球部屋内練習場
- ・「テントサイト」－陸上競技場 等

なお、平成23年12月1日からは現在の場所(旧明友館)に災害ボランティアセンターを置いている。  
 ※石巻専修大学での災害VCは、平成23年3月15日から同年11月30日までの活動となった。





# 災害ボランティアセンター各班の役割



5号館前に設置した受付用テント



全国からボランティアが駆け付けました

## ①本部

災害対策要綱に基づき、大規模災害発生時において被災住民に対し、ボランティアによる支援活動を、円滑で効果的かつ安全に実施するため、センター運営の方針を決定する。

行政等の関係機関との連絡調整を行うとともに、情報の一元化を図り来客と報道等への対応を行った。

## ②総務班

資金、義援金・物資の管理、会計・情報の収集及び発信並びに証明・記録等の事務

※本部と一体とした。

## ③受付班

ボランティアの受付及び募集・活動の諸注意、オリエンテーリング

## ④登録班

登録・保険の加入手続き及びボランティアの照会並びに保険申請事務

## ⑤ニーズ班

電話や来所による被災住民からのボランティア派遣依頼の受付（ニーズ票作成）・ニーズ調査（被災地域へのセンターチラシの配布）

ボランティア及び支援者からの問い合わせに対応し、現地までの交通情報、地理的情報を提供。



ボランティア受付



受付ボランティアの協力も頂きました



ニーズ班



ボランティアの活動報告

### ⑥地図班

ニーズ票を基に、センターから派遣現場への地図を準備。また道路状況を把握し、各班に情報提供する。

### ⑦マッチング班

ニーズ票の内容により、必要なボランティア・資材数及び情報班からの情報をボランティアに提供する等を検討し、現地へ派遣。

ボランティア活動報告書に基づき、ボランティア活動の進捗状況を踏まえ、今後の活動展開を検討する。

### ⑧資材班

資機材及び物資の管理及び調達・使用施設の管理。

### ⑨情報班

ニーズ票及び市民からの問い合わせに対し、現地の状況確認が必要な場合は現調査を行い、ボランティア派遣の可否を判断。

また、県外からの独自支援ボランティア（NPOを含む）の情報を把握し、連携のため連絡調整をする。



マッチングの様子



資材の受け渡し



# 甚大な被害を受け注目された中で

## ～災害ボランティアセンター本部・総務班振り返り～

### ①支援方針の判断 ※その都度、判断を求められた、市民ニーズへのボランティア派遣

災害VCとしては、制約がある状態での受け答えを余儀なくされておりました。その要因として、本市の被害状況が広域であり、寸断された道路・水道の断水・ガソリン不足等、ボランティアの派遣及び活動が制限された状態であったため、道路・水道の復旧の進捗状況にボランティア派遣を合わせざるを得ない状況でした。

そのため、本部にて、毎日朝・夕に打ち合わせを行い、各班から報告される現状・市民やボランティアの声及び市等からの情報を元に、支援内容を本部としてその都度決定した。

### ②情報の一元化 ※支援者・報道等の関連機関への対応

本市は、今回の大震災による人的被害が大きく、報道をはじめ県内外の関係機関からの注目を集めることとなった。

災害VCも例外ではなく、来所・問い合わせが殺到した時期もありました。発災後から数か月は通信手段の復旧も地域差があり、災害支援の情報も錯綜し、災害VC運営に関しての誤解・疑念を生じかねない状況であること、本会からの情報提供に差異があってならないと判断し、特に災害VC運営に関する情報提供については、本部事務局長からの発信とし収集された情報は本部一元化の対応とした。

### ③想定外の業務 ※緊急小口資金貸付・高速道路減免に係る証明・苦情対応

想定外の業務と被災者への緊急小口資金貸付の臨時窓口の対応が挙げられます。

被災による生活資金に関する相談、及び貸付制度の特例化により、市役所内に設けた臨時相談窓口には相談者が殺到し、本会職員・支援派遣いただいた県外社協職員は一定期間、1日300人以上の相談を受け（約1ヶ月で5,000人）災害VCと並行しての業務となった。

また、融資に関する苦情等の問い合わせの電話が殺到し、災害VC業務に支障をきたすことが多くあった。

続いて、高速道路減免に係る証明事務が挙げられます。

全国から大勢のボランティアに、本市に支援に来ていただいたことには大変感謝しておりましたが、この高速道路減免に関する問い合わせが殺到し、本来、被災市民の要望を受けるための電話が繋がりに難くなったこと、限られた人員で運営していた災害VCスタッフの負担になったことも事実であります。

また、未曾有の大惨事であるがゆえ、想定していなかった市民からの要望、多くのボランティアを受け入れたことからのテントサイトでの問題やボランティアの迷惑行動等から発生した苦情対応等、その都度、即時対応を迫られる判断を本部は求められました。

# ボランティア 復興へ向けての支援の力と課題、そして経験を活かすために！

## ～災害ボランティアセンター各担当職員の振り返りとして～

受付班：菅原 英人

- 朝一の受付処理が一番のかき入れ時間帯であり、この時間帯だけは人海戦術で乗り切る必要があった（特に土・日曜）。
- 資材班がいる野球部屋内練習場までは距離があり、プレハブ倉庫を受付近くに設置していた。ここにはマスク、タオルなどすぐ使う資材や水等など保管しておく場所として便利で重宝した。
- 行政サイドから毎日の報告を義務づけられていた、ボランティア数の把握は、市内・県内・県外の別の数、男女別の数であった。このため、受付カードから必要事項を転記して集計していく必要があり、一番手間取った部分であった。当日活動したボランティア数、3月15日開所日からの通算数をそれぞれ算出していた。
- 全社協・県社協の応援もありがたいことであった。この応援があつて初めて石巻方式ができたのだと思う。職員派遣をいただけたことにより、災ボラ職員も休みを取ることが可能となった。
- 活動時には水分補給は必須であり、持参の水が定期的に災害VCに届けられたのはありがたいことであった。不足した場合でも総合運動公園に滞在していた自衛隊から優先的に譲っていただけた。公用車のガソリンも同様である。

ニーズ班：平塚 信一郎

● 3月から4月上旬のニーズの受け入れ内容は、生活スペースの確保と新規依頼者を優先的にボランティア派遣をしてくこととし、屋内の片づけ支援への派遣と限定した。これはあまりにも派遣対象が多く、かつボランティア数の見込みも出来ていない状況での苦渋の判断であった。

● 4月中旬から、屋外片づけの支援をできるようになったが、その要因は、屋外へ運び出したガレキ・土囊の処理、そして独自に活動していたNPO等のボランティアが屋内外の支援を始めていたことより、災害VCでは「何故対応できないのか？」との問い合わせが殺到し、屋内限定の支援を優先することが限界となった。市民は独自活動のボランティアとの区別化は、分からないことでした。

● 想定外だったことは、特に5月の連休前後から、高速道路減免に係る証明に関することや小口融資に関する問い合わせ、さらに、市及び災害VCの現状等の問い合わせが多く、市民からの電話が繋がりにくくなり、苦情となった。

● また、ボランティアの方には失礼にあたるかもしれませんが、基本的なマナー・地元への配慮の無い方の問い合わせが目立ってきた。例えば、「石巻市へどうやって向かうのですか？」「ボランティアで支援するのに、入浴も宿泊も対応してくれないのか？」等々、対応していた我々も、“ボランティアの気持ちがあつて、来ていただけるのか”と疑ってしまう方もおりました。

● 一方で、市民からの感謝の言葉・ボランティアの方々からの支援協力・エール等の温かい言葉を沢山いただきました。苦情対応等で気持ちが折れそうな時、この言葉で復活することができたことも事実であります。



#### マッチング班：今野 啓夫

本市に支援に来ていただいたボランティア数の最高は2,000人という日もあった。この数は災害VCへ依頼があった活動に対して照会した数であり、独自でボランティアをした方達を含めれば2,000人以上の数になると思われま

す。ボランティアの方々は、お願いしたことについてどんなことでも自分の出来る範囲でやってくれました。本当にありがたいことではありますが、どこまで住民のニーズに応えるべきなのか毎日協議し、職員間で共通見解をしっかりと持つことができました。例えば住居を先にするのは当然ですが、1階が商店で2階が居住スペースの場合はどうするのかなど、多種多様なことがありました。よくニーズは生き物と言われていますが、そのため毎日行っていた会議はとても重要だと感じた。

また、毎晩NPO・NGOやボランティア団体の方々に集まっていただき、ミーティングを行いました。この集まりを誰が名付けたか「マッドバスターズ」というネーミングで呼ばれるようになった。内容は家屋の片づけ・泥出しに関する活動について災害VCとしての活動の方向性を皆さんに認識してもらうことで、活動の支援内容を統一し、各団体によって活動の内容に差がでないようにバランス良い支援が出来るようにしました。また、当日の活動での困り事や提案、協力体制の方法など災害VCを中心として各団体と連携をとり進めていけるよう協力いただいたおかげでスムーズに出来たと思います。

#### 資材班：山崎 菊治

あれだけの災害にも関わらず、災害VC（石巻専修大学）までの陸路は、何とか確保されていきました。そのため、ボランティア及び支援物資の早期受け入れが可能であり、また、大学より配慮いただき、屋内練習場を資材庫として使用できたことが、資材管理・受け渡し・修繕等、効果的な支援に繋がったと感じております。

発災直後、支援物資はボランティアの持ち込みに頼らざるを得ず、特に汚泥処理に活用した土嚢袋は、多い日には1日10,000袋以上も使い、市の資材庫（当時は自衛隊管理）より、全国から搬送された物資で随時補充することしかできませんでした。全国から提供いただいたものや、ボランティアが持参した土嚢袋で何とか対応しました。この場をお借りして改めて御礼申し上げます。

ボランティアのボランティアとして活動してくれた青年達があります。資材庫の活動の他、仮設トイレの清掃・給水車で飲料水確保・専修大学敷地内のゴミ収集等、一般のボランティアがしないことを優先的に活動してくれた青年。活動を終えたボランティアが、毎日泥まみれで資材庫に戻って来て、1日の活動で疲れていても、最後に、道具の汚れを洗い流していくその姿を見るのが嬉しいと言ってくれた青年。

彼らの力も直接支援されたボランティアの力となったことを我々は忘れません。

# 全社協ブロック社協支援一覧

1クール	
平成23年3月19日～3月24日	
大阪府	(1)
和歌山県	(1)
2クール	
平成23年3月23日～3月28日	
香川県	(1)
徳島県	(2)
3クール	
平成23年3月27日～4月1日	
兵庫県三木市	(3)
香川県	(1)
徳島県	(2)
4クール	
平成23年3月31日～4月5日	
大阪府和泉市	(1)
兵庫県多可町	(1)
兵庫県太子町	(1)
奈良県	(1)
和歌山県	(1)
香川県	(1)
徳島県	(1)
5クール	
平成23年4月4日～4月9日	
香川高松市	(1)
香川県琴平町	(2)
島根県	(1)
島根県美郷町	(1)
兵庫県西宮市	(1)
兵庫県尼崎市	(2)
徳島県	(1)
徳島県つるぎ町	(1)
6クール	
平成23年4月8日～4月13日	
香川県東かがわ市	(2)
島根県奥出雲町	(1)
島根県	(1)
島根県大田市	(1)
徳島県	(1)
徳島県東みよし町	(1)
兵庫県香美町	(1)
兵庫県新温泉町	(1)

7クール	
平成23年4月12日～4月17日	
香川県丸亀市	(2)
大阪府高石市	(1)
島根県	(1)
島根県松江市	(1)
徳島県	(1)
徳島県東みよし町	(1)
兵庫県三田市	(1)
兵庫県篠山市	(1)
8クール	
平成23年4月16日～4月21日	
広島県呉市	(1)
香川県観音寺市	(2)
滋賀県	(1)
徳島県吉野川市	(1)
徳島県	(1)
兵庫県	(1)
兵庫県佐用町	(1)
兵庫県上郡町	(1)
9クール	
平成23年4月20日～4月25日	
香川県坂出市	(2)
島根県	(1)
島根県出雲市	(1)
徳島県藍住町	(2)
兵庫県伊丹市	(1)
兵庫県猪名川町	(1)
10クール	
平成23年4月24日～4月29日	
香川県さぬき市	(1)
香川県善通寺市	(1)
島根県	(1)
徳島県阿波市	(1)
徳島県	(1)
京都府南丹市	(1)
島根県安来市	(1)
兵庫県たつの市	(1)

11クール	
平成23年4月28日～5月3日	
香川県綾川町	(1)
香川県観音寺市	(1)
京都府京都市山科区	(1)
徳島県阿波市	(1)
徳島県	(1)
兵庫県三田市	(1)
山口県長門市	(1)
京都府亀岡市	(1)
京都府南丹市	(1)
和歌山県すさみ町	(1)
12クール	
平成23年5月2日～5月7日	
兵庫県三田市	(1)
兵庫県香美町	(1)
兵庫県新温泉町	(1)
島根県松江市	(1)
島根県雲南市	(1)
香川県高松市	(2)
香川県三豊市	(1)
徳島県	(1)
徳島県阿波市	(1)
13クール	
平成23年5月6日～5月11日	
島根県	(1)
香川県	(1)
香川県多度津町	(1)
徳島県	(1)
徳島県藍住町	(1)
京都府南丹市	(1)
兵庫県西宮市	(1)
兵庫県三田市	(1)
14クール	
平成23年5月10日～5月15日	
善通寺市	(1)
香川県多度津町	(1)
島根県	(1)
島根県浜田市	(1)
徳島県	(1)
徳島県石井町	(1)
兵庫県豊岡市	(2)
兵庫県姫路市	(1)
京都府福知山市	(1)



15クール	
平成23年5月14日～5月19日	
京都府八幡市	(1)
兵庫県猪名川町	(1)
香川県東かがわ市	(2)
徳島県	(2)
徳島県美波町	(1)
島根県	(1)

16クール	
平成23年5月18日～5月23日	
大阪府豊中市	(2)
兵庫県養父市	(1)
兵庫県朝来市	(1)
島根県	(1)
島根県益田市	(1)
香川県高松市	(2)
徳島県阿波市	(1)
徳島県	(1)

17クール	
平成23年5月22日～5月27日	
京都府与謝野町	(1)
京都府宇治市	(1)
島根県	(1)
島根県吉賀町	(1)
香川県高松市	(2)
徳島県美馬市	(2)

18クール	
平成23年5月26日～5月31日	
京都府久御山町	(1)
京都府精華町	(1)
香川県琴平町	(2)
香川県	(1)
徳島県	(1)
徳島県三好市	(1)

19クール	
平成23年5月30日～6月7日	
徳島県石井町	(1)
徳島県阿南市	(1)
香川県丸亀市	(2)
香川県坂出市	(2)
島根県	(1)

20クール	
平成23年6月6日～6月14日	
香川県三木町	(1)
香川県	(2)
島根県浜田市	(1)
徳島県	(1)

21クール	
平成23年6月13日～6月21日	
香川県丸亀市	(2)
徳島県藍住町	(1)
島根県松江市	(1)
島根県江津市	(1)
島根県斐川町	(1)

22クール	
平成23年6月20日～6月28日	
香川県高松市	(2)
徳島県板野町	(1)
徳島県北島町	(1)
島根県飯南町	(1)
島根県隠岐の島町	(1)

23クール	
平成23年6月27日～7月5日	
香川県さぬき市	(1)
香川県三豊市	(2)
香川県三好市	(1)

24クール	
平成23年7月4日～7月12日	
徳島県北島町	(1)
徳島県小松島市	(1)
島根県邑南町	(1)
香川県東かがわ市	(1)
香川県琴平町	(1)

25クール	
平成23年7月11日～7月19日	
徳島県阿南市	(1)
徳島県三好市	(1)
香川県三豊市	(1)
香川県多度津町	(1)
島根県松江市	(1)

26クール	
平成23年7月18日～7月26日	
徳島県つるぎ町	(2)

27クール	
平成23年7月25日～8月2日	
香川県さぬき市	(1)
徳島県東みよし町	(1)

28クール	
平成23年8月1日～8月9日	
香川県坂出市	(2)
徳島県那賀町	(1)
徳島県松茂町	(1)
岡山県備前市	(2)

29クール	
平成23年8月8日～8月16日	
香川県さぬき市	(1)
徳島県上勝町	(1)
徳島県海陽町	(1)
徳島県三好市	(1)
島根県出雲市	(1)

30クール	
平成23年8月15日～8月23日	
徳島県吉野川市	(1)
徳島県阿波市	(1)
徳島県三好市	(1)
香川県宇多津町	(1)
山口県岩国市	(1)

31クール	
平成23年8月22日～8月30日	
徳島県海陽町	(1)
徳島県佐那河内村	(1)
香川県坂出市	(1)
香川県まんのう町	(1)
島根県	(1)

※府県名、市町村名の後の社会福祉協議会の表記は省略いたしました。  
※( )内の数字は人数を表しています。

宮城県社会福祉協議会が全国社会福祉協議会に職員の派遣要請をした結果、全国各地の社協職員の方々に、災害ボランティアセンターの運営協力をいただきました。(日程は上記のとおり)

この調整のほかに各社協から運営支援の協力をいただきました。皆様のご支援に心から感謝申し上げます。

社協名	延べ日数	延べ人数
宮城県大崎市	180日	503人
茨城県ひたちなか市	35日	10人
広島県東広島市	12日	7人
北海道内の社協 <sup>※1</sup>	17日	7人

※1 北海道社協からの調整で、紋別市・江別市・羽幌町・京極町・遠軽町・厚岸町の各社協から運営協力いただきました。

# 物資・物品、寄付金 提供一覧

1	(一財)世界宗教者平和会議日本委員会	62	(株)M C F	125	Club Lizard Yokohama
2	(一社)国際電子貢献証明発行協会	63	(株)七十七銀行	126	JA 塩野谷 いちご部会喜連川支部
3	(一社)白山・石川建設業協会	64	(株)ナカニ	127	J B C Cホールディングス(株)
4	(一社)日本自動車連盟宮城支部	65	(株)みずほカーテンメンテナンス	128	J F E商事(株)
5	(公財)昭和会	66	(株)ルミネクリエイツ	129	Klinik Silima
6	(公社)関西経済連合会	67	(株)B I S S	130	Life Studio
7	(社福)朝日新聞厚生文化事業団	68	(株)LIXIL ビバ	131	NPO DOING
8	(社福)阿南市社会福祉協議会	69	(株)MonotaRo	132	NPO 現代の理論・社会フォーラム
9	(社福)和泉市社会福祉協議会 ボランティア市民プラザアイ・あいロビー	70	(株)MS-Japan	133	NPO 今治センター
10	(社福)加東市社会福祉協議会	71	(株)R E P	134	NPO コソガイ
11	(社福)河北町社会福祉協議会	72	(株)愛農流通センター	135	NPO 団体 静岡市民活動支援センター
12	(社福)さくら市社会福祉協議会	73	(株)アクアホーム	136	NPO 法人 石川県救助犬協会連合会
13	(社福)さぬき市社会福祉協議会	74	(株)石井不動産	137	NPO 法人 災害移送支援ボランティア Rera
14	(社福)佐用町社会福祉協議会	75	(株)いすゞ製作所	138	NPO 法人 災害防災ボランティア未来会
15	(社福)三好市社会福祉協議会	76	(株)一の蔵	139	NPO 法人 日本を美しくする会 中部ブロック
16	(社福)多摩市社会福祉協議会	77	(株)運動科学総合研究所	140	NPO 法人 丸亀ボランティア協議会
17	(社福)手をつなぐ福祉会 しょうぶエバンズ	78	(株)大塚製菓工場	141	NPO 法人 よろず相談室
18	(社福)東かがわ市社会福祉協議会	79	(株)オーバン技研工業	142	NPO 任意チーム・センダイ交流団
19	(社福)村上市社会福祉協議会	80	(株)オンワードマエノ	143	NTT 東日本 弘前代理店受付センター
20	(社福)市原市社会福祉協議会	81	(株)会館志ほ川	144	YKK AP(株)
21	(社福)宇陀市社会福祉協議会	82	(株)勝栄土建	145	愛コープ港南
22	(社福)宇田津町社会福祉協議会	83	(株)門倉組	146	愛知人 (ai-chi-jin)
23	(社福)大阪市社会福祉協議会	84	(株)クロイスターズ	147	アオハルプロダクション
24	(社福)大崎市社会福祉協議会	85	(株)経済法令研究会	148	秋田中央印刷(株)
25	(社福)香川県社会福祉協議会	86	(株)コーコンスカイ	149	浅草橋ボランティア隊
26	(社福)茅野市社会福祉協議会	87	(株)色彩工房藍	150	芦屋市民
27	(社福)紀宝町社会福祉協議会	88	(株)島半	151	綾瀬市役所
28	(社福)京都市社会福祉協議会 福祉ボランティアセンター	89	(株)清水ゴム商会	152	飯南町ボランティアセンター
29	(社福)郡上市社会福祉協議会	90	(株)正業エンジニアリング	153	石岡市ボランティア連絡協議会
30	(社福)恵会若草保育園	91	(株)スタンレー宮城製作所	154	石川県庁県民文化局県民交流課
31	(社福)小美玉市社会福祉協議会	92	(株)スポーツビズ	155	インダテ写真場
32	(社福)境町社会福祉協議会	93	(株)大伸物産 大阪営業所	156	石巻工業高校 J R Cボランティア
33	(社福)さくら市社会福祉協議会	94	(株)ダイナム	157	石巻市立河南西中学校
34	(社福)桜島保育園	95	(株)大輪通商	158	イズミ(株)
35	(社福)佐野市社会福祉協議会	96	(株)滝沢建設	159	泉区中二地区民児協会
36	(社福)下野市社会福祉協議会	97	(株)ダンロップホームプロダクツ	160	移動販売車まごころ
37	(社福)杉の子会	98	(株)チノンズ	161	射水地域建築組合
38	(社福)逗子市社会福祉協議会	99	(株)トヨタレンタリース神戸	162	入間市ロータリークラブ
39	(社福)聖テレジア病院	100	(株)ハミングバードスポーツ	163	ウイリング横浜
40	(社福)千葉県社会福祉協議会	101	(株)ヒューマンアイ	164	牛女舎
41	(社福)豊中市社会福祉協議会	102	(株)フジテレビジョン	165	エーザイ桜友の会
42	(社福)那須塩原市社会福祉協議会	103	(株)ブリヂストン	166	エコ・ジャパン(株)関西グループ
43	(社福)南丹市社会福祉協議会 八木支所	104	(株)松尾工務店	167	エジプト大使館
44	(社福)はぐるまの会	105	(株)みすず書房	168	えびす屋 鎌倉店
45	(社福)東大阪市社会福祉協議会	106	(株)ミゾタ	169	エフビー介護サービス(株)
46	(社福)東広島市社会福祉協議会	107	(株)モーバーホーム	170	大分県佐伯市役所 企画商工観光部
47	(社福)平塚市社会福祉協議会	108	(株)八重椿本舗	171	大阪府茨木市教職員組合
48	(社福)藤沢市社会福祉協議会	109	(株)ワトム	172	大崎 E M 支援センター
49	(社福)碧南市社会福祉協議会	110	(株)ワンビシアーカイブス	173	大田区被災地支援ボランティア調整センター事務局
50	(社福)松伏町社会福祉協議会	111	(株)桑名事業所	174	大塚製菓株仙台支店
51	(社福)三木市社会福祉協議会	112	(有)石井設備サービス	175	大場設備工業(株)
52	(社福)三鷹市社会福祉協議会	113	(有)神岡緑化工業	176	大林道路株東北支店
53	(社福)三田市社会福祉協議会	114	(有)山本美装	177	岡造園
54	(社福)紋別市社会福祉協議会	115	(有)石渡造園土木	178	おかやま山陽高等学校
55	(社福)養父市社会福祉協議会	116	(有)九州ヘルメット工業所	179	忍野村立 忍野中学校
56	(社福)横浜市社会福祉協議会	117	(有)照工作所	180	おそばの会一同
57	(社福)慈生会 ベタニアホーム	118	(有)プロアシスト	181	小田原市ボランティア連絡協議会 黒羽支部
58	(社福)西宮市社会福祉協議会	119	(有)ポルテコム	182	笠間飲食店組合
59	(特非)日本アーティストユニオン	120	(有)メロディアスハンズ	183	カシオ計算機(株)
60	(特非)プレジャーサポート協会	121	(有)ヤシマオート	184	鹿島建設(株)東北支店
61	(特非)やわらぎの会	122	(有)山下重量	185	かぜんぐ
		123	「旧雄勝町」震災支援の会	186	学校法人 岩谷学園
		124	ANLOOP	187	学校法人 柳学園中・高等学校

※この他にも、512名の個人の方からもご支援をいただき、紙面に掲載できなかったこと、ご了承下さい。

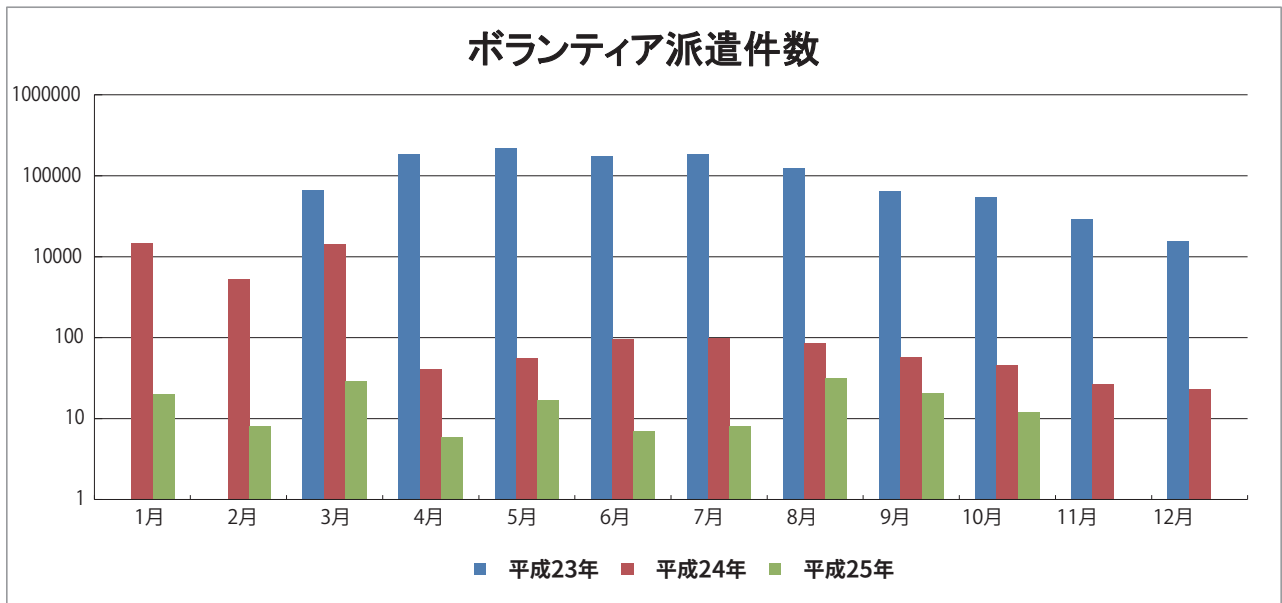
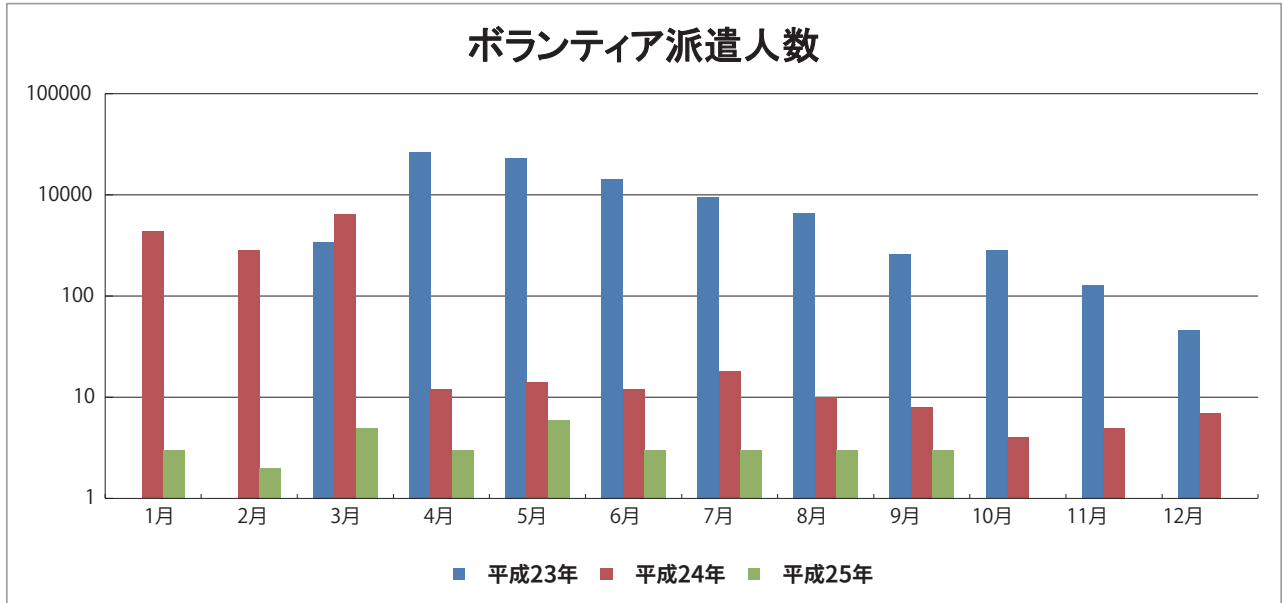


～あたたかいご支援、ありがとうございます～

188	加藤自動車	253	大和ハウス工業(株)川越支店	313	浜松やらまいか隊
191	カトリック天神町教会 抱僕館福岡	254	たかしま災害 ボランティアネットワーク「なまず」	314	はるなキリストの教会
192	金沢工業大学	255	高屋西生涯学習の古里づくり協議会	315	東かがわ市立誉水小学校
193	鹿沼市造園業組合	256	武田薬品工業(株)	316	東日本大震災ボランティアバックアップセンター
194	かねひら歯科クリニック	257	チーム暁	317	ひたちなか市
195	カフェ プレス ミー	258	チーム畑田	318	ひまわり会
196	鎌倉建築組合	259	チーム夢	319	兵庫県社会福祉法人経営者協議会
197	鎌倉小町商店会	260	千葉県稲毛区倫理法人会	320	兵庫県三田市高次区自治会
198	神岡町民一同	261	千葉県議会議員	321	平塚市立南原小学校 6年2組一同
199	川口北ロータリークラブ	262	千葉ライオンズクラブ	322	広島建設(株)
200	川崎市役所	263	中部アマリタ救援隊	323	ファーストリフティング(株)
201	柑橘青果物卸販売(有)杉山商店	264	鉄建建設(株)	324	福井市役所
202	関東電設(株)	265	天台観光・いちよの会・参金会	325	福岡大学
203	絆ひだまりの会	266	東金市ボランティア・市民活動センター	326	プロクター・アンド・ギャンブル・ジャパン(株)
204	岐阜県岐南町立岐南中学校	265	東京恵比寿ロータリークラブ	327	プロミス(株)仙台お客様サービスプラザ
205	岐阜県飛騨市神岡町有志一同	266	東京エレクトロン宮城(株)	328	文教大学
206	九州学院 みどり幼稚園	267	東京中央ロータリークラブ ボランティアバス活動委員会	329	ペインキャピタル・アジア・LLC
207	金光教少年少女会連合本部	268	東京都 総務局被災地支援課	330	碧南市赤十字奉仕団
208	クミアイ化学工業(株)	269	東京都 多摩市総務部防災安全課	331	碧南朗読の会
209	クロードチアリ音楽事務所	270	東京ハセツネクラブ	332	ベルシア日本文化協会
210	桑名市立 光陵中学校	271	東芝コンシューマー マーケティング 株式会社	333	ヘルスサポート緑
211	群馬県太田市立 宝泉小学校3年1組	272	東部漁協組合	334	保安産業(株)
212	興研(株)	273	東北関東大震災復興応援プロジェクト SDS2011	335	ボーイスカウト日本連盟
213	神戸市職員労働組合	274	東北総合美研(有)	336	北翔大学エクステンションセンター
214	珈琲職人	275	東北中央協会 拡大宣教会	337	ボランティア活動プラザみき
215	小海町	276	童夢カーボンマジック	338	ぼらんていあぐるーぷ 栗の里中津川
216	古河市商工会	277	徳島県阿波おどり保存協会、絵手紙教室有志	339	前田道路(株)
217	国民民主連盟(解放地域) 日本支部	278	とくしまボランティア推進センター	340	丸亀市役所 管財課 秘書広報課
218	こども本部白幡台こども文化センター	279	所沢市 介護保険サービス事業者連絡協議会	341	丸亀市立南中学校
219	狛江市 こまえボランティアセンター	280	栃木県総合教育センター	342	マルソー産業(株)
220	災害復興支援団体 GAR UDA	281	栃木県那須塩原市立黒磯中学校 第2学年	343	三菱商事フィナンシャルサービス 株式会社
221	災害ボランティアぐんま	282	鳥取県災害ボランティア隊	344	ミドリ安全(株)草加物流センター
222	サウスカップ	283	登米市社協職員親睦会	345	南九州市茶葉振興会
223	佐賀県立 唐津工業高等学校	284	ドルフィン伊豆	346	南房総市ボラセン
224	酒田市役所退職者会	285	中日本(株)半田工場	347	みのかもオユンナ号実行委員会
225	幸伸物産(株)	286	中日本高速(株)	348	宮城県民共済 生活協同組合
226	さゆり学園	287	中日本ハイウェイ・メンテナンス名古屋	349	宮城日野自動車(株)
227	参議院議員 熊谷大事務所	288	長野オリンピック記念	350	宮城ヤンマー(株)
228	サントリーホールディングス(株)人事部	289	長野県 東筑摩郡山形村役場	351	ミリオン 習志野店
229	信濃町立 信濃小中学校 4学年	290	長野マラソン大会組織事務局	352	みんなの党 東京都第24区支部
230	ジブラルタ生命(株)	291	那須塩原市ボランティア連絡協議会	353	むかわ町こぶし座公演実行委員会
231	手芸工房メロディアスハンズクラブ	292	ナスライン	354	武蔵野会
232	城南信用金庫	293	ナチュラルホリスティックセラピー協会	355	武蔵村山市文化協会
233	昭和会	294	西播磨ブロック社協	356	最上8市町村共同支援
234	ショーワグローブ(株)	295	日光森と水の会	357	桃生支部老人クラブ連合会 神取楽寿会
235	ジョブ・クローバー(株)	296	日進医療器(株)	358	もみの気ハウス
236	白髪王子様	297	日本警察消防スポーツ連盟	359	モルディブ共和国大使館
237	白井エコセンター(株)	298	日本競輪選手会 茨城支部	360	もんじゃ金太郎
238	信愛学園 えいわ幼稚園のぞみ幼稚園	299	日本財団	361	焼鳥つばき
239	真言宗智山派 不動院	300	日本シーゲイト(株)	362	柳学園中学・高等学校生徒会
240	新庄最上8市町村共同支援	301	日本聖公会 東北教区	363	横浜市太極拳協会 会員一同
241	新生銀行	302	日本福音ルーテル大岡山協会	364	酔灯屋
242	森林づくりボランティア FSCもりときぎ志一同	303	日本遊技関連事業協会	365	米倉加奈子プロジェクト
243	住みたくなるまち土器	304	日本を美しくする会 えひめ	366	ライオンズクラブ国際協会 330-C地区
244	生活協同組合 あいコープみやぎ	305	ニュージーランド政府観光局	367	リサイクル運動市民の会
245	セイコウアシストパートナーズ(株)	306	ねぎの会	368	リズム時計工業(株)
246	セイコーホールディングス(株)	307	能美防災労働組合	369	龍泉寺
247	専修大学 大矢根ゼミ	308	ノーマディック(株)	370	若松原ボランティア4, 26
248	創価大学	309	はぐるま共同作業所	371	わくわく倶楽部(株)
249	曹洞宗 大泉寺	310	箱根温泉A I A実行委員会	372	ワタキ自動車(株)
250	大興水産(株)	311	パタゴニア日本支社	373	和びさび
251	タイ大使館	312	秦野市役所東日本復興ボランティアツアー2陣		
252	ダイニングラウンジ ghetto				

当初の混乱の中で、お名前を告げず、ご支援をいただいた方々、誠にありがとうございます。

# 災害ボランティアセンター運営実績



石巻市への支援のため集っていただいた団体の方から、「情報の共有や活動連携」のためにも連絡会議が必要との要望があり、「NGO・NPO 支援連絡会」(※ P26 参照)として平成 23 年 3 月 20 日に第 1 回の会議が始まりました。その後、石巻市青年会議所の方々のご協力もあり「石巻災害復興支援協議会」として連日会議を実施しました。その効果は大きく、全国各地の様々な団体が石巻を支援してくださり、当センターにおいての活動人数と併せると、把握している限りで※約 30 万人の方々が活動したこととなります。

災害 VC (2014 年 3 月末現在)	復興支援協議会 登録数 342 団体 (2012 年 8 月末現在)	合計
116,670 名	172,693 名	289,363 名

※独自に活動されたボランティアも多数おりました。



## 都道府県別ボランティア実績（外国を含む）

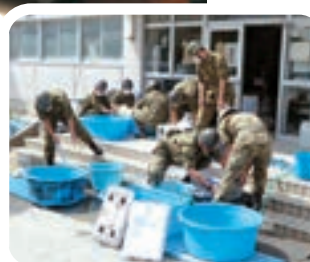
No.	都道府県	平成22～23年度	平成24年度	平成25年度	合計
1	北海道	510	3	0	513
2	青森	84	0	0	84
3	岩手	78	1	1	80
4	宮城	8,668	96	31	8,795
5	秋田	498	0	0	498
6	山形	6,998	40	4	7,042
7	福島	171	6	0	177
8	茨城	8,192	14	5	8,211
9	栃木	5,408	111	13	5,532
10	群馬	1,051	3	0	1,054
11	埼玉	4,524	40	0	4,564
12	千葉	13,860	23	2	13,885
13	東京都	21,479	55	6	21,540
14	神奈川県	6,625	42	8	6,675
15	新潟	1,123	15	2	1,140
16	富山	187	4	0	191
17	石川	860	1	0	861
18	福井	260	1	0	261
19	山梨	370	0	0	370
20	長野	715	8	0	723
21	岐阜	919	2	1	922
22	静岡県	1,157	11	4	1,172
23	愛知県	12,635	28	4	12,667
24	三重	544	0	0	544
25	滋賀	318	5	1	324
26	京都	809	16	1	826
27	大阪	6,741	6	9	6,756
28	兵庫	6,936	7	1	6,944
29	奈良	235	2	0	237
30	和歌山	68	0	0	68
31	鳥取	179	1	0	180
32	島根	185	0	0	185
33	岡山	161	2	3	166
34	広島	224	1	2	227
35	山口	99	8	1	108
36	徳島	71	0	0	71
37	香川	180	0	2	182
38	愛媛	85	8	0	93
39	高知	51	0	0	51
40	福岡	487	5	0	492
41	佐賀	52	10	0	62
42	長崎	56	0	0	56
43	熊本	92	3	0	95
44	大分	95	0	1	96
45	宮崎	51	0	0	51
46	鹿児島	83	2	0	85
47	沖縄	61	1	0	62
48	海外国籍 住所未記入	1,745	6	1	1,752
総合計		115,980	587	103	116,670

# 季節の移り変わりと支援 2011年(平成23年)3月・4月





# photo 2011年5月・6月





# photo 2011年7月・8月



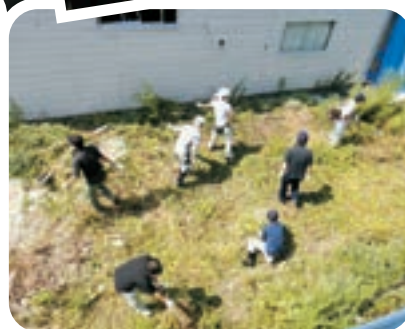
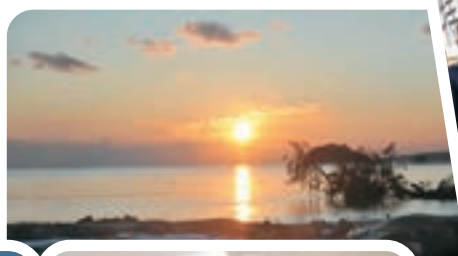


photo 2011年9月～12月





# photo 2012年(平成24年)





# photo 2013年(平成25年)～現在





# NPO・NGO・任意団体との連携

## ■ NGO・NPO 支援連絡会の立ち上げ

大規模な災害の中で、災害ボランティアセンターとしては「一般住宅及び店舗兼住宅」の復旧支援活動を柱とし、ボランティアの派遣調整をする一方、石巻市に駆け付けてくれたNGO・NPOの有志の声がけで、平成23年3月20日「NGO・NPO支援連絡会」を立ち上げ、多様なニーズに対応した。

その後、「石巻災害復興支援協議会」と名称を改め、活動の輪が広がることとなった。



全体会 (専修大学内)

## ■ 石巻災害復興支援協議会の存在

支援活動を円滑に運営するため、加盟団体のメンバーは毎日夕方7時に集まり現状の報告と翌日の対応について話し合いを行い、必要な支援が生じた段階で機能別チームを立ち上げる等積極的な支援活動を展開した。(平成23年5月13日一般社団法人「石巻災害復興支援協議会」を設置。)

※NGO・NPO等の団体が多くなってきたため、4月2日から、一般のボランティアとNGO・NPO団体を分けて役割分担をした。

- ①社協は一般の個人、企業、学校等のボランティアを担当
  - ②石巻災害復興支援協議会はNGO・NPO団体を担当
- 市・社協・災害復興支援協議会の任務分担を明確にした。



分科会 (マッドバスターズ)



一斉清掃決起

### ◆ 機能別（分科会）チーム

- ① 炊出し、②メディカル、③リラクゼーション、④心のケア、⑤キッズ（子育て支援）、
- ⑥移送、⑦ マッドバスターズ（泥だし、清掃）、⑧生活支援（仮設支援）、
- ⑨復興マインド（地域行事のサポート）、⑩ ダニバスターズ（避難所の衛生改善）



漁業支援



生活支援

### ◆ 石巻災害復興支援協議会活動事例

ボランティアセンターが窓口となり、市役所と連絡調整し、復興支援協議会の「炊き出し班」が自衛隊と各炊き出しチームが重複しないよう調整した他、瓦礫処理についても、市内を9ブロックに分けてガレキ処理、清掃等自主的な活動をして頂く等、効果的な活動を支援した。



石巻川開きまつりへの支援



幹線道路一斉清掃



# 「復興のために！」～ご支援いただいた皆さまの声～

発災以来、たくさんのボランティアさんやNPO・NGOの皆さまが石巻へと駆けつけて下さいました。皆さまからいただきました「温かい気持ち」や「力強いご支援」を、我われ石巻市民は決して忘れません。

石巻を支援して下さったたくさんのボランティア団体さんを、ここでは「災害ボラセン開設当初からの連携・支援団体」、「震災後の石巻で誕生した団体」、「既存の石巻市民による支援団体」の3つに分けて、それぞれ数団体の担当者の方に当時を振り返るインタビューをしましたのでご紹介いたします。

## ◆災害 VC 開設当初からの連携・支援団体◆（順不同）

災害ボラセン開設時より、復興支援活動及びNGO・NPO 連絡会にて情報共有・連携協力などをしてきた団体であり、センター運営に関する支援・助言をいただきました。

また、中長期的に市内各所の拠点から、変動するニーズに合わせて独自に復興支援活動を展開しております。

団体写真	「当時の団体名○○○」（現在の団体名○○○○）
	役職_____ 担当者氏名_____
	団体紹介文 ○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
	質問 ①支援先として、なぜ石巻をえらんだのですか？
	②支援をしていて感じたこと（石巻の印象も含む）
③活動を通して苦労したこと	
④これからの石巻に向けて一言	

## 一般社団法人 ピースボート災害ボランティアセンター (PBV)

プログラムオフィサー 小林 深吾さん



東日本大震災では石巻を中心に延べ約8万人の災害ボランティアを受入れ緊急・復旧支援活動を展開してきました。

①発災後すぐに、東北への支援活動を行うことは団体として決定。これまでの東北との繋がりは薄く、さまざまな関係機関と連絡を取る中で、支援物資の受け入れをして下さったが石巻市社協さんだった。

とてもいいご縁ができたと思う。

②石巻市社協さんが、外から来る様々な団体と話し合いながら柔軟に対応していると感じた。地元の社協さんからすると、どのような団体なのか分からない状態で受け入れなければならないので、きっと大変だったと思う。

③炊出し調整の役割を担わせて頂き、多種多様な所から炊出し希望の電話を受け付けた。出来る限り支援したい方達の希望や善意を被災地に還元できるよう努めた。しかし、3月の状況下で材料、人員、水を準備できない方はお断りする場合もあった。家屋の清掃など多様な活動に、大勢のボランティアが関わってくれた。その分活動を運営するのは大変であったが、長期ボランティアリーダーが活躍した。みな初めての経験で手探りの状態で、悩み話し合いながら一つひとつ対応していった。判断が難しい場合、経験のある社協さんや団体さんの存在にも助けられた。

④支援する→支援される という関係を越えて、これからも石巻の方たちと共に歩んで行きたい。

## 特定非営利活動法人 MAKE THE HEAVEN め組 JAPAN

事務局長 谷口たもつさん



活動を始めて10年。現在は復興支援の他、孤児院運営等のカンボジア支援や国内外を問わず植樹活動を行っています。

①偶然。元から災害支援チームがあり、発災後すぐに団体として東北行きを決めていた。当時、ツイッター等で情報収集しながら北上していたら石巻方面が一番ひどいとなり、3/15に日本財団の黒澤さんと話をした結果、先発隊をとという事で16日に石巻入り、初めに物資を届けたのが湊小避難所だった。17日に災害VCで社協の阿部

さんとお会いし、その出会いが無ければここまでやってなかった。

②「ありがとう」がよく飛び交う所で、人って暖かいと思った。直接物資を渡す際、「自分よりもっと大変な人が居るから、そっちにあげてくれ」と言われたこともあった。ボランティアと市民が活動後つながることも多く悪い印象がない。社協の阿部さんが私たちを信用し、受け入れてくれたから長く居られたし、役割があったのも大きかったと。専修大学を借りられたのも良かった。あんなに広い土地で、交通アクセスにも良かった。だからあれだけの人数が集まり活動出来たのだと思う。

③誰も経験したことのない大災害でボランティアも初めてで、みんなの知恵を集めてやった感じだった。初めての東北である季節にテント暮らしは寒かった。

④半分私の思いだが、今の石巻に私たちができる事はできたと思う。今後は未来の石巻の子どもたちの為に森の防潮堤を作りたい。コンクリートではなく木で、何年何百年後にまた同じような大きな津波が来た時に、少しでも未来の色々な財産が助かれればと思う。ずっと寄り添いながら、未来に希望を届けていきたい。

## 特定非営利活動法人ジェン

東北事業部 復興支援グループ マネージャー 小暮 広行さん



1994年に設立された国際NGOで、『心のケアと自立支援』をモットーに世界各地で長期的な視野をもって支援活動を行っている。国内では、東北での活動が中越沖地震支援に続き2例目。

①震災直後の情報収集・アセスメントにおいて、石巻市が最も被害が甚大だったため。

②今回のJENの活動では、世界各国から多くの支援に支えられたことにより様々な支援活動を実施できた。また、家・仕事・大切な方を

失った多くの被災市民が、それらの支援活動に支えられながら、絶望的な状況の中でも互いに助け合い、励ましあう事で復興に向かって前向きになってきている印象。

③炊出しでは材料入手が困難な中で衛生面にも配慮し、温かく栄養価の高い安心して食べられる食事をとれる環境づくりに苦労したが、計24,067食を提供した。

泥出しボランティアの受入では、活動が重複しないように他団体と連携・調整を図りながら効率的な支援実施を心がけた。夏は悪臭の中でいつ終わるとも知れない量のヘドロや瓦礫処理の為、人員配置とボランティアの体調にも配慮した。避難所から仮設住宅への移行期には、仮設全世帯への生活必需品70品目の配布を実施。配布品の一部は、住民の必要性に叶えるように配慮した。熱暑の中での作業など苦労はあったが、4月末から9月末まで5カ月に渡り計6,890戸全てへの配布が完了。

④「被災した市民もしていない市民も、笑いあえる時が少しでも早く迎えられよう、互いに助けあえる石巻」となる為、これからもスタッフ一丸でサポートします。



かつて日本人が経験したことのないこの未曾有の災害復興のために、日本財団では過去の災害救援で培ってきた経験を元に、組織の総力を持ってROADプロジェクトを立ち上げ、被災地で様々な支援活動を行っております。

①震災翌朝は名取に居て災害VC立ち上げを手伝ったら北上するつもりでいた所、先発隊から情報が入り湊小で2000人位の人が途方に暮れていて大変だという事で、名取VCスタートと同時に石巻に

活動場所を移した。石巻は死者行方不明者も多く自治体としても被災範囲も大きい。以前から何度か訪れていた事もあり石巻に主軸を置く事にした。

②社協・各団体との連携がやりやすかった。災害ボランティアが出来た阪神の頃の団体は活動家が多くそれぞれアイデンティティを強く主張していて、団体間で連携するなど本当に団体数が少なくなってきた。一番感じたのは、全体会でこうしようって事に対しみんなが一致団結してやっていくまとまり。多分世代交代した今の団体の性格だと思う。「まちなかスマイル」などの各団体の協力も普通は有り得ない初めての経験だった。石巻災害復興支援協議会と、社協の存在は大きい。

③苦労した事というより悲しい、それ以外ないね。被災地入りする時、感情を入れないと決めた。人の死や不幸や悲しみを自分の中で考えるのをやめないと続かないと思い活動をしたつもりだったがそうはいかなかった、人間だから。それが嫌だった。だからクールダウンする場所として拠点や専修大学とかが大事だった。

④ROADプロジェクトは、Resilience will Overcome Any Disaster. どんな困難も乗り越える力！共に乗り越えましょう！

## 特定非営利活動法人オン・ザ・ロード

オン・ザ・ロード理事 伊知地 亮さん



世界各国で経済的・社会的な理由で学校に通えない子たちのために無料の教育支援をしている。東日本大震災でも支援活動開始。延べ25,000人のボランティアを被災地に送り、現在も宮城県石巻市・福島県で、復興活動を継続中。

①東日本大震災の甚大な被害を受け、我々にも出来ることはないかと数人でピースボートが最初に参加したボラバスに参加した事が始まり。ボランティアを足止めする報道とは裏腹に多くの人手を必要

としている現状を目にしたから。

②被災者の方々に寄り添う支援、地元へ根づいた支援を目指してきた。活動した一人ひとりが「ボランティア」対「被災者」でなく「人」対「人」として接してくれたことで、地元の方々からの協力や理解を得ることができ、信頼関係や長期的な活動へ繋がった。同時に、石巻は素晴らしい食文化が根づく地産品の宝庫であると教わり「その素晴らしさを全国に伝え、食べてもらう中で復興を応援したい」という願いでオンラインショップを立ち上げた。

③未曾有の大震災で、大規模災害支援の運営ノウハウを持った者が少なかった。しかしその中で、石巻市災害対策本部、石巻市災害VC、石巻災害復興支援協議会、また石巻で活動する多くの団体からノウハウを学びながら活動させていただいた。本日まで活動してこられたのは、石巻の方々、ご支援いただいた全国の皆様のお陰。

④復興に向け、石巻の方々と共に歩み長期的な活動として尽力していく所存。今後は石巻の方々が自立して収入を得られ、若い人たちが住み続けたいような街づくりと、観光客が石巻に遊びに来たいと思えるような魅力的な複合施設「ロングビーチハウス」の建設を目指している。今後も多くのご理解・ご協力をお願いします。



## ボランティア支援ベース絆 (現・一般社団法人 OPEN JAPAN)

阪神淡路大震災の支援活動からの『縁』を元に、石巻に集結した同志達と様々なプロジェクトを展開。OPEN JAPAN は日本カーシェアリング協会、ヒューマンシールド神戸、四万十塾、他全国の縁ある個人・団体が連携しながら日本の扉を開くプロジェクトを展開する組織です。

### 一般社団法人 日本カーシェアリング協会 代表理事 (一般社団法人 OPEN JAPAN 代表理事) 吉澤 武彦さん



全国から寄せられた善意の中古車を活用し、車を被災された方々を対象にカーシェアリングによるサポートを石巻で行う。

①阪神淡路大震災の際、支援団体『神戸元気村』で活動した同志の吉村誠司さんと木村と一るさんは、その経験を元に日本財団の黒澤さんの協力を得て『ボランティア支援ベース絆』を立ち上げた。お2人とは面識がなかったが神戸元気村代表だった方から仮設住宅でのカーシェアリングの提案をいただいたご縁で石巻に辿りついた。

②カーシェアリングは車を被災した方を対象にしているけど、車を持っている人でも「やります」っていう方がいる。どういうことかということ、困っている人に協力するためにこの取り組みをサポートしたいということ。「震災で生きるか死ぬかという状態で助かったこの命を、人のために使いたい」、そういう話を何人かから聞いた。たくさん大切なモノを失った石巻の人達の中に生まれたそんな気持ちと行動が、素晴らしいと思う。そういう方々がいらっしゃる石巻は、必ずいい街になる。

③いっぱい苦労みたいなのはあったけど、忘れたなあ…。

④石巻は、大きな可能性を秘めています。一歩ずつ前に進みましょう！私たちはそれを全力で応援します。

### 災害救援 NGO ヒューマンシールド神戸 (一般社団法人 OPEN JAPAN 顧問) 吉村 誠司さん



撮影：SUZUKI ARITO

2003年に神戸で発足、紛争国での平和活動から、国内外での災害救援活動を行っている。インドネシアや中国などの大地震やフィリピン台風被災地でも現地入りし活動中。現在、事務局は長野県北部。

①震災当日の夜中、福島を抜ける頃に気仙沼の住宅地にどんどん火が燃え移っていると聞いていて、翌朝には日和山の向こうが真っ赤に燃えているのを見たが、ラジオで石巻の情報が流れていなかったのも更に北を目指した。6日目に改めて石巻に来たが、石巻は北のリアス式海岸の被災地と比べ広範囲だがその分ボランティアで1階部分の瓦礫を取りのぞけば、きっとまたそこに暮らすことが出来るだろうという望みがあって、石巻に拠点を移そうとなった。

②今回、社協が被災地域を「面」でボランティアに任せてくれたのが良かった。

社協のたくさん溜まっていたニーズ票を受け取りつつ同じ地域をやらせてもらえたから、「明日、何百人ボランティアが来ます。」となっても、前日に打ち合わせしておく次の日スムーズに現場へ誘導できた。石巻は地域性があるすごく面白く、いつも怒っているような喋り方の漁師さんたちが本当はすごく優しくったのが印象的。

③この大震災は被災地がとんでもなく広いから、活動するうえでの寄付が思ったようには集まらないのが苦労と言えば苦労だったかな。

④無くしたものは多いけど、新しく作るものはすごく多いと思う。石巻に限らず、被災地の人達がね。被災地責任って言葉あって、中の人だからこそ発信して伝えてられること。こういう時は、いろんな可能性があると思うのでそういうのをチャレンジしてほしい。だから、カヌークラブとか地元の人達が動き始めてすごくうれしい。石巻は可能性がいっぱいだ！



人に優しく、環境にも優しくをもっと四万十川でのカヌートレックを通して環境問題・永続可能なライフスタイルを提案している。阪神淡路大震災での活動経験を活かし支援拠点及び各種プロジェクトの立ち上げと運営を行う。

①震災直後、右手骨折の中、東北エリアに足を向ける。リサーチと仲間たちとの情報収集を繰り返す中、震源地に一番近い場所で直感的にここだと感じたから！

②石巻は災害に対しての準備が進んでいたことで、ボランティア等の受け入れがとてもスムーズだったと感じた。このことが、復旧活動がはかどることにつながったのだと強く思う。

③広域に渡る大きな被害と、首都圏からの距離。方言の把握。

④災害という状況を、乗り越え、一歩進んだ、未来ある復興が楽しみです！！そして、きっと、みんなの故郷となることでしょう。

## 特定非営利活動法人キャンパー

代表理事 飯田 芳幸さん



キャンプで習得した技術等を活用し災害時の炊出し活動や精神的ケアを行い、平時はキャンパーの育成等を行っています。

①震災後すぐに自分たちの受け入れ先を探し始めたが、被災地は当然連絡がつかなかった。埼玉県のさいたまアリーナ避難所へ支援物資を持って行った際、NHKの方に相談したら色々動いてくれて宮城県社協のVCの番号を教えてくれた。事前に支援物資と資機材を現地に送らないといけなかったので、大崎市居たメンバーのもとに急遽

宮城支部を立ち上げた。宮城県社協のVCに連絡した所、支部から一番近い石巻市を紹介してくれたのが始まり。

②私たちが物資の野菜を持って行った際、湊小学校避難所の代表の方が野菜に付けられた宮崎県民からのメッセージを、校庭からメガホンを使って読み上げてくれた。そうしたら、窓がちょこちょこと開き始めて、みんながすごく喜んでくれた。その光景が嬉しかった。

③キャンパーはオンタイムで働く人が殆どで、人員確保に苦労した。今回の活動を通じて、最初から地元住民に手伝ってもらうことを前提とする活動に方針転換した。自分達だけでやるには限界があるが、自立支援のために行っている事なら、人の面倒を見る事で一番自立できる。困っていることはお互い補完し合おう。

④日本中どこに住んでいる人でも、何らかの形で心を痛めている。その痛みを本気で感じた人は、畏敬の念がとても強いと思う。その人達に向けて石巻市民が発信している情報や言葉は凄く浸みると思う。だから、もっと色々な所で語ってほしい。言葉の重みが違う。あらゆる機会を利用し、こちらから出向いて語るのも良いと思う。



## RQ 市民災害救援センター河北 VC(現・復興支援チームリオグランデ) 代表 塚原 俊也さん



石巻大川地区の子どもたちとの活動を中心として、週末の自然体験や拠点民家を利用した居場所づくりを行っています。

① RQ としては、3/21 に登米市の廃校になった鱒淵小学校に現地本部を構え、そこから順次気仙沼唐桑・小泉、南三陸歌津、石巻市河北と沿岸部近くに拠点を構えた。河北では4/1 から拠点を福地の公民館に構え活動を開始した。

私が勤めている、くりこま高原自然学校で冒険キャンプ野営地として大川中学校校庭を借りていたご縁や、私が被災した岩手宮城内陸地震の際、県沿岸の方々に支えてもらった事への恩返し、また以前お世話になった方々が既に石巻入りしていた事など個人的に大きな理由もあり、石巻に拠点を作った。最後の決め手は、地元の方が拠点となる施設を紹介してくれた事と谷地地区への支援要請があった事。

②石巻の受援力と石巻市社協の皆さんの覚悟と柔軟さを感じた。多くのボランティアに施設提供をした石巻専修大学の決断と、復旧復興にはNPO・NGOの力が必要という社協の考え方が印象的で、社協の各団体との連携や役割分担の考え方が素晴らしかった。石巻災害復興支援協議会の存在も緊急支援期の情報共有、NPO・NGO間の連携強化に大きな役割を果たしたと思う。阿部さんの「ボランティアは心と心の支え合い」や、黒澤さんの「そこが更地になってもボランティアが来たという足跡が大事」など、被災された方の心の支えとして記憶に残ることが大切だと感じながら活動していた。

③ボランティアとして何が大切か見失わない事。目の前の被災者にとって何が必要かを大事にしながら支援内容を考えボランティア同士の調整や情報共有をしていた。

④震災により加速した過疎や雇用等の課題に向け、石巻がこれからの日本の地域づくりの良いモデルとなるよう祈ると同時にできる事は協力していきたいです。

## 一般社団法人 キャンナス東北

作業療法士 野津裕二郎さん



震災直後から地域で活動をしている看護師中心の医療系団体で、神奈川の全国訪問ボランティアナースの会キャンナスが母体。「ありがとうにありがとう」をモットーに、現在ははりハビリの委託事業やコミュニティサロン活動を展開。

①震災直後からキャンナス代表に色々な方から石巻が大変だという情報が入った。代表の知人医師からも石巻の医療関係者を助けてくれないかと要請があった。また、代表の祖父母が石巻出身で、そのようなご縁が繋がり石巻に入る事になった。

②東北人の我慢強さ。実は日本は東北に支えられている事。特に今後の高齢化社会、少子高齢化などの対策やチャレンジが今東北でされている。日本の最先端の現場の一つであるという事。支援をしているという事は、実は東北から支援を受けているという事。支援抜きにして、東北に惚れている方が多く居るという事。

③医療系団体だが活動内容は多岐に渡る。その中で、常にビジョンを明確にしていき日々の業務を実施していく。当たり前の事ですが、震災後から東北に来ている人やお家を無くされた地元の方。スキルも様々な方が集まった組織という難しさを感じている。その中で、チームとして石巻という地域で必要性のある事を、目標を持って実施しているので苦労は尽きないが、地域に支えられて頑張る事が出来ている。

④官民一体となって震災前より進化した日本を背負って立つ地域にしていける様に私達も努力し参ります。熟練者も若者も共に立ち上がる今の石巻が好きです。しかし、だからこそ取り残されていく方々が居る事も忘れずに、そのような方々を支えていく術を共に見つけていけたらと思っております。

## ◆震災後の石巻で誕生した団体◆（順不同）

発災後、NPO・ボランティア団体の情報共有の担い手として誕生した団体及び、石巻市での支援活動が起因となり誕生したボランティアグループ。  
被災市民のニーズを災害ボランティアセンターと協働し活動されていました。

団体写真

「当時の団体名〇〇〇」（現在の団体名〇〇〇〇）  
役職\_\_\_\_\_ 担当者氏名\_\_\_\_\_  
団体紹介文 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。

- 質問 ①団体を作ろうと思ったきっかけは？  
②支援をしていて感じたこと（石巻の印象も含む）  
③活動を通して苦労したこと  
④これからの石巻に向けて一言

## 一般社団法人 石巻災害復興支援協議会（現・みらいサポート石巻）

専務理事 中川 政治さん



発災後、情報共有・支援の効率化を目的にボランティア・NGO・NPOが登録参加し、発足した協議会。

①当協議会は災害VCがなかったら存在しない団体だった。災害VCの開設後、石巻に集まって来た災害支援経験のあるNPO・NGOが、社協さんの声掛けで3月20日に始めた「NPO・NGO連絡会」が発足の契機。災害VCが個人ニーズを聴き取り県外ボランティアのマッチングをするのに対し、NPO・NGOの連絡会では各団体の自主的な活動内容や各活動エリアに関して、有機的な連絡・情報共有が行われた。その連絡会の事務局を法人化する形で設立した。

②③石巻の支援活動に関しては、NPO・NGOが大きな役割を果たしたと思う。災害VCを運営する社会福祉協議会に対して、NPO・NGOの窓口が単なる民間団体という状況で信頼性が低く、例えば高速道路代金の減免申請にあたって「あなた達は一体、何者なのか？」という問い合わせがある一方で、寄附を頂戴するなど説明責任を求められる面も出てきたため、5月に法人化した。NPO・NGOそのものが余り知られておらず、理解を得るのに苦労したかもしれない。

④震災前から地域に内在していた過疎高齢化等の課題もあるため、これからの石巻が復興事業の中で歩いていく一つのステップが、将来、日本の地方都市に共通する課題に対応する道標になると感じる。「あの時、いろいろ助けてもらったから。」と思ってくださる市民の方々が、より良い未来を選びとり、作りあげていく…。そんな石巻になればいいな、と思う。

## アモール石巻（現・BIGUP 石巻）

代表 原田 豊さん



災害VCに集まった個人ボランティアから自然発生した任意団体で、市内の泥出しや瓦礫撤去作業の活動を展開した。

①災害VCの朝の混乱は目に余るものがあり、試しに2日間同じメンバーで作業したら少し待ちぼうけ時間が短くなり、チームの作業時間が増えVCも手間が省けお互い楽だと気付いた。そんな時、50人くらい集まる機会がありそのまま1つのチームにした。その流れで「アモール石巻」が誕生した。あの時はここまで続くと思わなかったな。

②まず視覚の衝撃が大きかった。被災した街で触れ合う人たちは高齢者が多く温かく迎えてくれたが若者が少なく感じた。ボランティアに参加する人も宮城県内の方が思っていたよりも少なく残念というより憤りを感じた。

③長きに亘るテント生活。当時は「被災した方に比べれば…」という考え方だったけど、今は無理かな。精神的には「石巻にいながら休んではいけない」という強迫観念で苦しかった。あと、事務方のボランティアさんがほしかった。探す余裕もメールを打つ余裕すらなかった。でも自分の場合帰りが遅くなるとVCで弁当をいただいたり地域住民が風呂をかしてくれたり色々フォローしてもらっていた。活動で困った事があるとVCや他団体が力を貸してくれたのも心強かった。

④少しでも震災があって良かったと思えることを一人一人が作ってほしいです。それをぜひ見守らせて下さい。





点と点で集まった個人ボランティアが石巻を支援するため発足した団体で、フェーズに合わせ様々な活動を行いました。

①組織化する事の利便性。常にまとまった人数がいればニーズに安定して答えられるし、自分達が日々現場で感じる事を仲間と話すことでモチベーションを保てた。長期メンバーがコーディネーター的役割を果たし、団体としても知識や技術を積み重ねられた。あの大変な時期に団体設立に向けて社協の方々がサポートをしてくれた事は大きかった。

②人の温かみを感じた。でもあの時期はそれぞれの考えや背景が様々で、近所の方同士の温かい関係を保つには難しいものがあった気がする。石巻で困っている人の為になればと思っけていても逆に支えられていることが多く、「ありがとう」の一言や笑顔に逆に励まされた。

③活動に伴う知識・技術も無く初めての事ばかりの中で、ボランティアをまとめること。最終的に全てうまくやり切れたとは思わない。現場では住民それぞれボランティアに対する捉え方が違い、ただの便利屋と思っている方への説明や、ボランティア側のしてあげたい強い気持ちの調整は難しかった。今思えば、住民参加を意識するようになった4月頃は、住民さんへの呼びかけや他団体との活動日程など、調整に苦労した。

④軽はずみなこと言えないけれど、持ちつ持たれつでこれからも一緒にがんばりましょう。そして、今までの石巻に「ありがとう」。

◆既存の石巻市民による支援団体◆(順不同)

これまでの活動や培ってきたノウハウを生かす形で、震災後に石巻市民自ら復興支援に立ち上がり支援活動を始めた団体さんです。独自に各支援団体等と連携しながら得意分野を活かした活動を展開しています。

団体写真

「当時の団体名〇〇〇」(現在の団体名〇〇〇〇)  
 役職 \_\_\_\_\_ 担当者氏名 \_\_\_\_\_  
 団体紹介文 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。  
 質問 ①支援活動を始めたきっかけは？  
 ②支援をしていて感じた事  
 (他団体の印象、連携等含む)  
 ③活動を通して苦労したこと  
 ④これからの石巻に向けて一言

NPO 法人石巻スポーツ振興サポートセンター



スポーツ活動を通して健康とコミュニティを育成し元気な明るいまちづくりを目指し平成14年から活動している団体。

①当団体は、広くスポーツの素晴らしさや汗かく心地よさを知ってほしい思いで平成14年に法人格を取得。震災があろうがなかろうが困っている人をサポートするという事に変わりなく、やる事がちょっと変わっただけで違和感はない。

②被災者を甘やかし過ぎ。よそから来ていっぱいしてやりたい気持ちは分かるがそれが仇になる事もある。当時、物資に皆が群がっていたのを何度も見て石巻市民が何故こんなになったかと悲しかった。ボランティアさんには被災者が自立に向けて進むにはどんなアドバイスがいいか頭の片隅に置いて応援して欲しい。ボランティアさんがそんな話をするとなら被災者の中には食って掛かる人もいるから、家も無くなった被災者の一人として発信している。

③私のメッセージを中々理解してくれない人もいるが、家や家族をなくした人だけが被災者ではなく、家が残った人も皆が被災者だから皆で頑張れば復興も早くなる。

④今一番、仮設に居る方々も「小さな事でも私たちも石巻の復興へ向けて頑張っています」というようなメッセージを発信して欲しい。そして、「こんなにいっぱい支援を受けているのだからみんなできんぱっぺ」という気持ちを起こしてもらいたい。

## 特定非営利活動法人 石巻復興支援ネットワーク

代表理事 兼子 佳恵さん



一人一人が復興の担い手となり、誰もが笑顔で暮らすことのできる温もりと活気のある石巻を目指し、よりよい復興へ向けて主体的に活動する市民の育成とサポートを行う団体。

①当時中学生だった息子は一晩避難所で過ごした。翌朝帰ってきて「家の物を持ってすぐ避難所に戻りたい」と言われたが、3日後に毛布と食糧を持って行かせた。息子の「何でもっと早く行かせてくれなかったの？」の声に代わりに自分が動けばよかったのだと気づいた。

なぜあの時できなかったのかという自責の気持ちが強くなりこの活動を始めた。

②3月末、石巻専修大にNPO/NGO連絡会ができた聞き行ってみたが、主婦が参加できる時間帯ではなく、また余震が頻回で子どもを置いて行く不安もあり断念した。幸い、市民活動を続ける中での色々なネットワークがあったので、それらを頼りに出来る事から始めようと思った。

③ボランティア主催のイベント等で食べ物や物も全部タダであげて「被災者＝お客さん」という状態が腑に落ちなかった。私達はあの年の9月からずっと「自立支援」を推進してきたが、その中で時折聞かれた「ボランティアのくせに何もしてくれない」という依存心の強い方からの非難や他団体からの批判には悩まされた。

④一人一人が復興の担い手として長所を發揮できるようサポートしていきたい。また、自分が復興の担い手であるという自覚を持つ人を一人でも多く増やしていきたい。

## NPO 法人 にじいろクレヨン

代表 柴田 滋紀さん



石巻市を拠点に、未来を担う子どもたちの健全育成を通して心豊かな明るい社会づくりに貢献する活動を続けています。

①あの日、自分は助かったこの命を役立てなければと思った。避難所では子どもがとても大人しく気になった。自分はお絵かき教室や剣道の指導、美術講師をしてきたので子どもの為に何かできると思い、姉の協力も得て折り紙や鬼ごっこで遊ぶ事からスタート。3/22だった。

②ボランティアさんの8割は変…と言ったら失礼だが自分の気持ちを抑えられずに来た方で、ありがたいけど大変だった。ただ、たくさんの方が来てくれたお陰で残り2割の心ある人達は今も繋がってくれていて、我々の心の支えであり財産である。

③今思えば当たり前だが最初は親御さんも疲弊しネグレクト気味で、子ども達はやり場のないストレスで荒れていたというか動物に近い状態だった。私はそんなものと分かっていたけど大丈夫だったが、子どもにツバを吐かれたり「死ね」「もう来るな」と言われたりして傷ついたボランティアさんがいた。でもそのケアなど全くできず、折角のボランティアさんを上手くもてなせなかった。避難所や仮設で子どもの遊び声が大人のイライラを助長させてしまい、クレームの対象となったのは苦しかった。

④我々は10年間子どもたちの居場所づくりを続けます。そこにはコミュニティの力やそこに住む方々の力が必要なので、地域の皆さんと共につくっていききたいです。



# 「地域のリーダーとして！」～市民の声～

東日本大震災で自ら被災しながらもその時置かれていた立場などにより、地域のお世話役やボランティアの受け入れ等を行った方もいらっしゃいました。ここでは市内の自治会長さんや民生委員さん方に当時を振り返っての苦悩やボランティア活動への感想など、貴重なお話をお聞きしましたのでご紹介いたします。

当時の役職 \_\_\_\_\_ 氏名 \_\_\_\_\_

質問 ①震災当時の事について  
②ボランティア活動についての感想

## 貞山町内会（山下地区町内会長連絡協議会）

会長 藤井 勝さん

①地震発生後、ただちに地区の被害状況を調べながら貞山小学校に行くのと既に避難者がいた。ここは貞山小学校と好文館高校が主な避難先でまさか津波は来ないだろうと自宅に戻ったら、後になってずーっと水が上がってきて2分も経たずに長靴より上になり、向かいの独居高齢者の方と妻と共に急いで好文館高校3階へと逃げた。3日間は全て学校のお世話になったが、自分たちの事は自分たちでしようとして自治組織を立ち上げ避難生活のすべてを受け持った。初期には市や消防などの公的機関は当てにならない。これまで助け合いの町づくりをしてきたので寝たきりの方を助けることができた。しかし、そばにいる人だけで要援護者の情報を活かせる状況ではなかったため、こうした経験を生かし今後の町づくりをしていかなければならないと思う。

②ボランティアさんの活動を直接目にしたのは今回が初めてだった。涙を流しての感謝感謝で、とにかく驚いた。本当にありがたかった。被害のひどいお宅・ハンデのある家庭を順に案内し泥かき、側溝清掃、家財道具の撤去等してもらった。町内の側溝清掃は住民総出でボランティアさんと一緒に作業したのが印象に残っており、汚れ・疲れ・臭いを共有したことで感謝の話題は今も絶えない。災害は知らない。しかし避けられないもの。他の市町村で不幸にも災害が発生した時はすぐに現場にお手伝いに行きたい。同じ思いの市民は多いだろう。その時は社協で募るようなことも期待している。

## 下大街道第二町内会（釜大街道地区町内会長連絡協議会）

会長 佐藤 満さん

①発災当日は出張中で、名古屋空港で飛行機に乗ったら「仙台空港で何かあって着陸出来ないから降りて下さい」と言われ、やっとの思いでホテルに着きテレビを見たら津波だった。大街道に津波が来れば中央商店街は全滅と幼い頃から言われていた。石巻まで辿り着いたのが発災4日後。自宅では家族が2階に避難していた。すぐ町内の役員を集め我々が出来る事は何かと相談をした。とりあえず水、食糧、粉ミルク、紙オムツが欲しかった。大街道小学校に物資が来ていると噂で、分けてと頼んだら行政の方から「ここは小学校分だけなので出来ない。自衛隊ヘリで好文館高校に物資は降りているのに何故取りに行かない。」と言われたが、それまで知らなかった。機能していない町内会がたくさんある中、うちの町内の方々には凄く協力してもらった。ご主人が仕事先や自宅の被災後の跡片付けをするなか女性が集まってくれて「これはこっちに置いて」「工夫して配って」と、女性の得意分野で機敏に動いてくれて助かった。やはり日頃から女性陣に町内会活動に参加してもらっていたのが功を奏したと思う。

②NPOと名乗るような大きな団体は私の元には来なかった。2～3人でキャリーバックに「チョコレート持ってきたので受け取って下さい。」と言う方がいたが、少なくとも800世帯は居るのに30個くらいだったので断った。宗教団体で「お金いりませんか」と来たが、うちの地区では一切宗教には関わらないという考え方だと断った。ボランティアさんには側溝等の大量の泥かきで大変なお世話になった。残念なのはそういう時に見学している住民が居たこと。我慢できず「ボランティアさんはそんな趣旨じゃ無い。主役は私達だから長靴履いて一緒にやろう。」と言ってしまった。

## みなといち会（湊地区町内会長連絡協議会）

会長 庄司 慈明さん

①発災時は湊の職場に皆でいた。大津波警報をラジオで知り、地域を自転車で「逃げろコール」して回っていたが、知人が津波襲来を知らせてくれ「この活動も限界か」と思い、近くの湊小学校に向かった。すでに避難した人たちが「来てるぞ、早くしろ」と大声で教えてくれ、急いで校舎の2階にまで逃げ込み校庭を見たら全て真っ黒に変わっていた。後5秒遅かったら命はなかったと思う。最初避難者はてんでに避難していたが、町内会ごとはを基本に基本的に先生方と教室を組み換えた。この大変な状況乗り越えるには少しでも知り合い同士と一緒に過ごした方がよいと判断した。食事は3日間全く無く、4日目夜おにぎり300個が届いたが取ってそれは配らなかった。「1500人の避難者に300個ではかえって空腹感が増す」「ここに多くの避難者がいることは外部に知れたからこそおにぎりが届いた。次の食糧も必ず来る」と説得した。避難所は、その避難者のためだけにあるのではなく在宅避難者の為の「センター的役割」を果たす必要がある。平等を基本とした運営を心がけた。

②全体として高い完成度の献身性を身に付けた方々だと実感した。思想信条、人種・宗教の違いを超えて、「被災者を救え」この一点で集まった世界各国、全国各地の方々への尊敬と感謝の念は今も変わらない。しかしながら「恩は返すもの」という、人としての常識が被災者を複雑な思いにさせていることへの理解も必要と思う。目の前のボランティアに対し「恩返し」出来ない状況にある被災者心理を、極々少数だが理解しようとしめない人達がいた事は残念。生きることは人としての使命。より良く生きるための力をボランティア活動が与えてくれたことに、深謝している。

## 水明町内会

副会長 久保 武士さん

①あの日は出先で地震に遭い、急いで帰る車内で大津波警報を聞いた。津波が来る感覚は無かったが当時は副会長だったので、家族の避難を確認し水明町民会館に向かい避難を呼びかけようとした。しかし指定避難所が遠く噂ではもう街の方まで水が来たというので合流した役員さんと開北小学校に避難させてほしいと頼んだら校長に快諾いただき、車で町内に避難を呼びかけた。校門より先は先生方が教室の割振りや誘導をしてくれた。車のタイヤも水に浸かり始めた頃「平屋の年配夫婦がまだ来ないから連れて来て」と住人に言われ、その家まで案内してもらいなんとか連れて来られた。今思うとこれが普段から大切な見守りであり共助のあらわれだろう。避難者数は校内・車内にざっと1000人は居た。

②避難先は指定避難所でないから食糧も無く、発災2～3日後、開北小学校に縁があるスーパーの社長が2～3日続けて差し入れをくれ、一部を分けてもらい町内に配布したがあっという間に無くなった。自宅避難者ももう食糧がなかった。1週間後くらいから市の配給が届き始め3月21日からは町内分を町民会館で配り始めた。初めは上手くいかない事もあったがアイデアを出し合いながらやり方を変えていった。当時は震災ゴミが多く3つの公園内に置かせ分別の看板まで作ったが守られず、段々家庭ゴミも出て来るようになった。当時は「大変な時に役員になっちゃったなあ。」と思ったりもした。食糧等は各戸に配る余裕がなく体の不自由な人だけは民生委員さんの判断で届けた。あの大変な時にボランティアが沢山来て炊き出しや泥かき等本当によく助けてくれ、今でも深く感謝しているのと同時に、住民が自助・共助の重要性を理解しなければと思っている。



①うちは寺なので以前からこういう事が起これば遺体安置所になったり炊き出しをしたり…そうなるだろう心積もりは自分の中にあった。あの日、コミュニティセンターの鍵をすぐに開け心配なお宅3軒を回り避難させ、15:20には既に津波が来ていた。そのままセンターが避難所になり200人程が身を寄せ、震災で家は90軒中13軒しか残らなかった。お墓に繋がっている山の簡易水道を繋いで使えたのは大きかった。いいかは別として流された家の使えるガスボンベを拾って使い、米など出し合い朝・晩炊き出しし、皆で生きようとしていた。女性陣が班やリーダーを決め回すようになったのが良かった。あの緊迫した状況下の避難生活で、大人だけではなく子どもが居てくれたことで随分助けられたと思っている。

②ボランティアさんにはずいぶん来てもらった。ある銀行がボランティアでしているカラオケ会等は今も継続してくれていて、個人的な炊き出しやお祭りの手伝いなどにもお世話になっている。しかし、うちの方では瓦礫の撤去や漁業系のボランティアさんはお願いしなかった。甚大な被害の中、漁業がとて出来ずに収入が途絶えている所に、瓦礫撤去は国の予算で生業になった。ボランティアさんの入り方によっては、瓦礫は早く片付いても生業が奪われてしまうので、精神的な部分の支えとしてお世話になった。私自身はボランティアというのか、仮埋葬で土葬になる方を拜ませてもらった。命題として、コミュニティの再生の重要性を今回の被災で現実的に感じた人が多いと思う。田舎ならではの風習を過干渉と取るか、皆が知っている安心感と取るか、昔のままがいいとは言わないがいざという時助け合える地域にしていきたい。

①あの日は畑で並々ならぬ揺れに襲われ、津波が来ると思いすぐ家で家族に避難を指示し生活センターに向かった。そこに置いてある拡声器で海岸付近を叫んで回り、心当たりがある要援護者のお宅へも呼びかけをし、そろそろ自分も…と思っていたら逆に高台から「来たぞー！」と叫ばれ、神社に逃げて無事だったが、亡くなった方の多くは一度避難したのに大事な物を取りに戻った方ようだ。その後は避難生活で集団地の家が残った方々に毛布や米や水を貰ったがいつまでもそういうわけにはいかず、田んぼに引いていた水を引っ張って使ったり流されたガスボンベを持ってきて使ったりしていた。あの時は生きるためには必要だった。電気の復旧は5月のGW明け、水道はもっと後だった。民生委員としての活動は6月30日に集まって情報交換したのが震災後初で、それまではとても定例会どころではなかった。昨年の一斉改選で今は欠員が出たままだが仮設に住む方もいる中で選出が難しい。この地域では54軒がダメになり、うちを含めた3軒だけが何とか残った。22軒が高台移転する予定だがこれからコミュニティの再生をどうしていくかが大きな課題だと感じており、その為にまずコミュニティセンターを建ててほしいと市に要望している。

②まず昭和三陸地震の津波で高台移転していた集団地の方々には本当に助けてもらった。自衛隊からの物資(食糧)支援も助かったし、風呂を貸してくれる場所への移送等もしてくれてお世話になった。警察、消防、自衛隊やボランティアによる行方不明者の懸命な捜索で発見される方もいて有難かった。ボランティアでは、心のケアに来た方や日本在住のカナダ人で水道関係の滅菌や浄化槽の設備などをしてくれた方が印象に残っている。

# 社会福祉協議会としてのこれから

## ■市民と共に活動することが基本

- ①社協の日常業務としてのボランティアセンター運営の重要性
  - ・全国の市町村で災害が発生した際に、石巻市として市民ボランティアを派遣する体制づくり
  - ・福祉活動に対するボランティアとしての意識付け運動
  - ・ボランティアセンターの登録団体のネットワーク化
  - ・大震災の災害復興期に向けた、今後の市民のボランティア活動のありかた
- ②社協としての地域福祉事業推進計画の必要性
  - ・市民と共同した事業の推進
  - ・地域コミュニティの再構築
- ③ボランティア支援活動のやり過ぎは、被災者の自立、自活を損ねることになりかねない。

## ■災害対応としての市民一人一人の心構え（大震災の教訓）

- ①災害時には、一般の電話は勿論のこと携帯電話も全く使えない。
- ②日頃から、避難場所を家族で確認しておく。
  - あわてずに心配なく、災害が落ち着いた後に会えるようにする
- ③家族の非常食（食料・水等）は、最低3日分は必要である。
  - 物資が届くまでの期間
- ④非常食の他に、懐中電灯、携帯ラジオ、タオル、毛布等をリュックサック等に入れてすぐに持ち出せるようにしておく。
  - 常備菜のほか、乳幼児がいれば粉乳、オムツ等も用意しておく
- ⑤自分の身は自分で守る。
  - まず、自分の安全を確保し、その後に他人の手助けをもらう
- ⑥遠慮なくボランティアの協力を頂く。
  - 家具の運搬、家の清掃等で人手が必要な場合は遠慮なく支援してもらう

◎災害の被害を最小限に抑えるためには、自助⇒共助⇒公助それぞれが、対応力を高め、連携することが大切であるといわれます。

**自助**—自分の安全は自分で守る（防災の基本）こと。

**共助**—近隣の方々と協力して、地域を守る備えと行動をすること。

**公助**—公的機関（国・県・市の機関・警察・消防・自衛隊等）や、電気、水道、ガス等のライフライン各社をはじめとする公共企業が、応急対策活動を行なうこと。



## ～結びに～

東日本大震災では、私自身そして石巻市社会福祉協議会も多くのことを学ぶことができました。

身内を亡くし住居が流出するなど、被災者でもある職員が多くいる中で、災害ボランティアセンターの運営を余儀なくされた職員の結束に感謝するとともに、国内外からご支援をいただきましたボランティアの皆さま、そして物心両面にわたりご支援を賜りました皆さま並びに各関係機関の皆さま方に深く感謝と御礼を申し上げます。

発災後から、あらゆる場面で即断・即決が求められる中で、災害ボランティアセンターの立ち上げと運営については、市当局との連携は勿論のこと石巻専修大学の絶大なご協力をいただいたことで十分な活動を行うことができました。あらためて石巻専修大学様に感謝申し上げます。

当時を振り返りますと、センターの指揮監督もさることながら、国をはじめとする各行政機関、社協、大学、企業関係者さらには報道関係等々、想像をはるかに超える来客者の対応に追われたことも被害規模の大きさを物語っていたものと思います。

ボランティアの募集と調整、さらには不足している土嚢袋など、各報道機関の協力をいただきながら全国発信をしたことや、センターの活動状況を見て「日本人のボランティア精神は素晴らしい」と感心して質問された外国のテレビ局が印象に残るひとつでもあります。

結びに、当会といたしましては災害ボランティアセンターの経験を踏まえ、人と人の絆を大切に「誰もが安心して暮らせる福祉のまちづくり」を基本に、地域コミュニティの構築に向けて、今後の活動を展開すべく「第二次地域福祉活動計画」を平成25年度に策定したところであり、ご協力をいただいた皆さまに恥じることはないよう、より一層努力して参る所存でありますので、石巻の復興を見守っていただきますようお願いを申し上げます。



石巻市社会福祉協議会  
常務理事兼事務局長

大槻 英夫

### 石巻市災害ボランティアセンター事業報告書

発行日 2014年3月31日  
発行元 社会福祉法人 石巻市社会福祉協議会  
〒986-0822 石巻市中央2丁目4-20  
TEL0225-96-5290 FAX0225-96-5223  
編集・発行 社会福祉法人 石巻市社会福祉協議会  
災害復興支援対策課  
〒986-0017 石巻市不動町2丁目16-10  
TEL0225-23-3911 FAX0225-23-3912  
印刷 株式会社 鈴木印刷所



